

家庭・保育所・幼稚園

1/24
1.
66(1)
1

幼児の教育

第六十六卷 第一号



1

日本幼稚園協会

幼児教育界で初めて!!



使いやすく便利な 指導の記録・雑記帳

幼児指導の記録

- この記録簿は、指導要録へ楽に記入できるようにくふうされています。
 - この記録簿は、個人別に指導の記録ができます。
 - ×式では得られない生きた記録がのこります。
 - おかあさんとの話し合いにも便利です。
 - 雑記的に、自由に書き込める記録簿です。50人分あります。
- 付録に、学級会計表、金銭出納表等をつけてあります。
- また、別冊として判りやすい「記入の手引」をつけてあります。

●この**幼児指導の記録簿**は、指導要録に安心してしかも自信をもって記入できます。

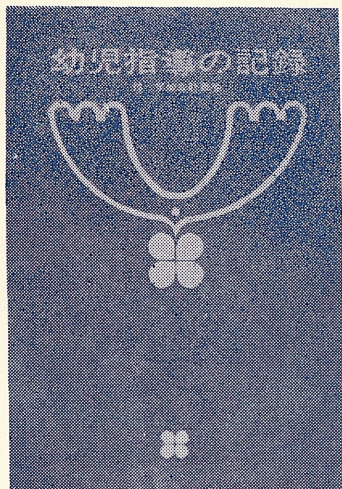
また、毎日の指導や管理にもたいへん役立ち、記入にむだな時間をとらないで済みます。

監修 玉越 三朗先生
宮内 孝先生
高橋 系吾先生
小山田幾子先生
富田 陽子先生

幼児指導の記録
付学級会計表等

定価 480円

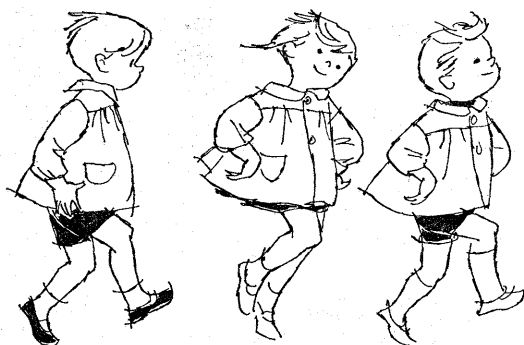
フレーベル館発行



幼児の教育 目次

—第六十六卷 一月号—

表紙 井口文秀



就学年齢は低下してよいか……………	津守 真……………(3)
教育をこう考える……………	伊藤 昇……………(9)
幼児の内面生活の理解……………	田中熊次郎……………(20)
幼稚園の現場において当面する一、二の問題……………	萬代 彰子……………(24)
幼児の心理と教育(一)……………	田中 敏隆……………(30)
幼児教育の現場の発展のために……………	菊池 ふじの……………(36)
幼稚園四十年(四)……………	岡田 鈴代……………(45)
幼児の創造的活動の指導(上)……………	香川 英雄……………(50)
音楽リズムを中心として……………	篠崎 謙次……………(58)
小学校一年生の学校生活(三)……………	浅山 英一……………(66)
幼児における運動機能の発展(三)……………	
生活の中に園芸を(一)……………	



撮影 鈴木孝雄

就学年齡は低下してよいか



津 守 真

一

いま、幼稚園に通っている三歳児、四歳児、五歳児の成長をみてみよう。三歳児は体も小さく、母親から離れると不安げである。

先生が一人ひとりの子どもに目をかけ、一人ひとりに話しかけ、子どもと親密な関係をつくっていくことによってはじめて三歳児の集団は安定する。先生が見えなくなると、三歳児は先生をさがして、先生のいくところにぞろぞろくっついてあるく。友だちといっしょの場所においても、ひとりで遊んでいる場合も多い。友だちと共通の目標をもって協力することはむずかしいのである。

四歳児も、四歳ではじめて幼稚園にはいった子どもは、当初は三歳児と同様である。先生と、子ども一人ひとりの結びつきは強

く、二、三人、数人の子どもの中のグループの中で親しく子どもにふれていくことによってはじめて先生の感化は子どもに及んでいく。二、三人の友だちのグループができて、友だち遊びがさかんになるが、その遊びは次から次へと変化していく。このことは三歳でも五歳でもある程度共通のことであるが、幼児期の子どもの遊びは、そのさきがどのようになっていくのか予測がむずかしい。幼児の活動は、おとなの常識をこえて、予想外のところのびていく。幼児の考え方は、型にしばられず、着眼するところも、新鮮である。それだから、たとえば四歳児の製作品は、でき上りはまとまりがわるく、手ぎわもよくないが、創造性の芽ばえをみることができる。

五歳児は、すでに適切な幼稚園の経験をつんでいれば、自分た

ちで活動をすすめることができる。朝、幼稚園に登園してきた子どもたちは、身支度をすませると、自分たちで遊びはじめる。昨日のつづきのごっこあそび、戸外のリレー競争など、数人から十人くらいの子どもたちが、自分たちで役割をきめ、人数が合わないときにはどうするかというような紛争を自分たちで解決し、子どもの遊びの中に先生がはいる余地を見出すことができないこともしばしばである。五歳児の終りころには、子どもたちのグループの協同意識や役割意識はいっそう明瞭になり、先生が少し助力を与えれば、何日にもわたって共同で一つの物を作ったり、あるいは、役割をきめて、自分たちでせりふを考え、劇をすることもできる。

五歳児の活動には見通しができてきて、目標の実現のためにいろいろと考え、工夫する。時間がじゅうぶんに与えられれば、彼らは時間をかけてこつこつとためし、工夫するのである。おとなの目からみると、小さなひとつのことに、子どもが時間をかけて工夫した成果であることが多い。このような活動の中で、子どもの創造性が養われ、思考力が培われている。これは科学教育の基礎である。

適切な幼稚園の経験を、一年あるいは二年経て五才児になった子どもたちは、集団生活で協力する態度の基礎を、自分たちのグ

ループの遊びの生活の中で身につけ、創造的思考力の基礎を、自発的活動の中で学んでいる。

五歳児は、幼稚園生活の花が開くときともいえるような、幼児期の最盛期である。彼らは、友だちと遊び、物を使って遊ぶ生活の中で、いろいろな能力や知識を獲得していく。四歳、五歳を通して、幼児期の教育は、遊びを基本とするものであること、また、幼児の集団生活においては、指導者が幼児の感情生活を理解して扱うことが必須であること、これらの条件の中で、幼児期の能力が十分に花を開くものであることを指摘しておきたい。

集団生活の態度や創造的思考力は、小学校の一年生、二年生の年齢になると、いっそう発達し、協力集団活動の規模も大きくなり、製作活動なども、いっそう複雑なものになっていく。もしも幼稚園の活動のように、小学校でも小さなグループの集団活動を重視し、時間単位をもっと大きくして子どもがじっくりと一つのものととりくむ余裕を与えることができるならば、この時期により多くのことを期待できるであろう。現状では、教科を中心にあまりに細分された生活形態であり、小学校低学年の学習能力をかせいでおとしている場合が多いというのが私の見解である。

しかし、小学校一年生の年齢、すなわち、六歳児になれば、現

状のように、教科中心細分主義教育形態でも、それに適応して使いこなすだけの能力をもっているといってもよいのであろう。あるいは、別言すれば、小学校の低学年の教師の教育技術と、実践的知恵がこれを補って、与えられた枠の中で最善の道がとられていたのであろうと思う。六歳児は、五歳児に比して急激に体力も増加し、自己統制力も増している。いやなことがあっても、そのときはがまんしておいて、別のときに、自分の楽しみをみつけるという、自分で使いわけをする能力ができてくる。この能力は、六歳児でようやくできるくらいのものであることを注意しておきたい。

もしも、現状の小学校一年生の教科中心細分主義が、一年下にさがってきたらどうなるであろうか。それはまったく幼児期の発達の特性にふさわしくないといわねばならない。現状で六歳に耐えるものならば、五歳児にも耐えるはずだというのであろうか。教育方法、教育形態の面で、五歳児の現状を変更する必然性は全くないといわねばならない。もしも、五歳児に小学校の一年生の現状の生活をおろしてきて、幼児から遊びの生活を奪い、教科中心細分主義の枠の中にいれるならば、幼児期に伸びるべき能力の芽をかえってつみとってしまうのであろう。それは、これからす

ます重要になってくる、科学教育の上にも重大な欠陥を残すものとなるであろう。このことを私は憂えるのである。

二

いま、就学年齢を引き下げた結果、五歳児を現状の小学校に入学させた場合の害について述べたのであるが、理想的に教育がなされたとした場合、集団教育は一般に何歳からなされたらよいかという問題について次に考えてみよう。

もとより、教育機能は生まれてすぐから始まるのであって、乳児には乳児期の教育があり、一歳児には一歳児の教育がある。しかし、乳幼児の初期には、その教育の場は原則的には家庭であり、教育者は母親である。子どもが友だちといっしょに遊びはじめ、定期的な友だちといっしょに遊ぶ場を設けることによって益するようになるはじめの年齢は、私は二歳であると思う。ただし、その場合は、時間も一、二時間という短時間で、週に一、二回、母親が見えるところにいるという条件をつけたい。人数も、七、八人程度でグループを形成し、保育者は二名必要である。この程度の規模で、内容が適切であるならば、二歳児の集団教育が普及することは、現代においては意義があると思う。三歳児は、二歳児の延長のようなものであって、小人数、短時間、内容的にもけ

つして高度になりすぎではならず、三歳児に適した生活形態でなければならぬ。五歳児就学問題が出てくると、幼稚園の三歳児クラスが急に増加して、しかも、四、五歳児と同様の扱いがなされるのではないということが心配である。二、三歳児の場合にはとくに、指導法が適切さを欠くときには、集団教育をすることがかえってマイナスになる。適切な指導をうけるならば、子どもにとって益するところ甚大であらう。

四歳児になると、一般的にみて、集団生活の効果は明瞭になってくるので、大多数の幼児が幼稚園に行くことは望ましいであろう。そして、四歳児、五歳児および、現在の小学校一年生を幼稚園で扱い、遊びを中心とした指導を行なうことは発達のみにて適切であると思う。

外国で就学年齢が五歳である英国において、あるいは、幼稚園の五歳児が小学校に付設されているところの多い米国においては、小学校の低学年の教育形態は、日本と全く趣きを異にしている。そこでは小学校低学年の教育は、幼稚園にずっと近い。時間の単位も大きく、学習は個人差を重視した分団学習で、子どもの自発的な興味や活動が尊重される。これは、この時期の発達に適した方法であり、学習能率の上る方法と考えてよいであろう。幼稚園をそれに近づけて考えるのではなく、むしろ、小学校が幼稚

園を理解せねばならぬ点も多いのである。学齡低下の論議に伴って、幼稚園が小学校に近づく傾向が増大するならば、順逆でとうである。

幼児期および小学校低学年では、個人差も大きく、生まれ月による能力の差も大きい。このような個人差を包容できるような教育形態を必要としている。生まれ月がおそいもの、ある能力が低いものが、わるく評価されたり、とり残されたりするような教育は、この人生の出発点の教育においてはとくに、けつしてなされるはならないのである。どの子どもも、その能力のままに受け入れられ、自己の力を十分に發揮して誇りをもてるような教育でなければならぬ。

就学年齢が五歳に引き下げられたことを考えると、生まれ月の早い、すぐれた子どもは乗り切っていけるとしても、半数の子どもはとり残されていくのではないか、それは人間形成の上で重要な欠陥を残すものになるであろうことを、この点でも私は憂えるのである。

三

幼稚園の必要性が現代のように切実になり、また従来よりもいっそう早期よりの教育が望まれるようになっているのは、現代都

市社会の社会的要請があることを見逃してはならないと思う。以前だったならば、幼児は野原の草や土の上で、母親が仕事をする傍で遊んでいればよかったし、子どもは自然の中で泥をこね、友だちと戯れる中で自然に教育されていた。しかし、現代の都市生活においては、三階、四階の公団住宅の限られた空間の中で、幼児は土にふれることもなく、走りまわる場もない。また、交通のはげしい道路のわきの商店街では、幼児は自分の場を見出すことができない。しかも、都市生活は、年々拡大しつつある。このような現代社会の中では、幼児の生活空間を確保する必要性が生ずる。幼児の成長に必要な自然環境をつくってやり、走ってもとび出しても安全な場所を確保してやるということ、以前ならばどこにもあった、このような場所を、とくに作ってやらなければ幼児の成長が保証できないという現代の社会条件の中に、幼稚園が普及しなければならぬ重要な要因があると思う。幼稚園は、人工化されつつある現代社会において、幼児が安心して十分に遊べるような場を作ってやるという機能を果たさなければならない。

四

五歳児の就学年齢を引き下げるといふ論がなぜでてきたかということについては、いろいろの臆測があると思う。政治的なのか

ひきや、小学校の教員の余剰対策などということが背景にあるとしたら、それは論外である。幼児教育というきわめて重要な問題が、そのようなことで左右されることが断じてないように、為政者、行政の立場にある方々に、申上げておきたい。

その上で、現在の就学年齢引き下げの論拠に、直接には二つの要因があるように思う。一つは発達加速の現象であり、他は、一般社会の要請である。

第一の点は最近の十数年は、児童の発達が以前と比べて一、二年早くなっているから、就学年齢も一年引き下げてよからうという考えである。身体発達からいえば、そのようなことがいえる面もある。しかし、精神発達全般に関していえば、幼児期における発達加速の現象は明瞭ではないといつてよいと思う。文字の習得などに関して、少し早くなっているかもしれないが、限られた側面について、半年くらい早くなっているという程度であらう。もしも詳細に調べることでできるとすれば、逆に、能力として低下しているものもあるのではないかと思う。この点に関しては、結論的にいって、就学年齢を引き下げるほどの発達加速現象はないといつてよいと思う。

第二の点について、幼稚園に子どもを入園させたいのに、幼稚園が少なく、入園期になると親が不安を感じるといふのは事実で

あろう。入園を希望する親が、安心して子どもを託することのできる幼稚園がもっと増加する必要があることはたしかである。その必要をみたすのに、就学年齢を引き下げるといふことは、どうしても必要なであろうか。国の援助のもとに、幼稚園を増設する対策をとることはできないのであろうか。

この二点からだけ考えると、学制改革をするほどの論点は出てこないように思うのであるが、もっと安全な他の方法が考えられないのであろうか。

現状の幼稚園は、一般に、けっして満足すべき状況でなく、幼児の発達に最適な条件を提供しているとはいい難いであろう。しかし、質的にも、量的にも、現代の幼児教育を向上させる方策は、他にもいろいろとあるであろう。一組の幼児数が多すぎるといふことは、自明のことである。この最低基準は何とかなければならない。

またこの分野で、教員養成が極度になおりにされていることは周知のことである。四年制大学の教員の養成の充実、幼児教育の専門家の育成、施設設備の改善等、実質的に手をつけねばならないことがたくさんある。それとびこして、一挙に就学年齢の低下を唱えても、いったい、どうしてそれを実現するのだろうか。教員は？教室は？設備は？どんな教育がそこで行なわれるの

だろうか、等々、次から次へと疑問が湧いてくる。もっといくつもの段階をへて、着実に、幼児教育向上の対策をととのえていく必要があるのではないか。

五

どのような教育制度をとるにせよ、五歳児の教育のために、今後どうしても必要な条件があると思う。簡潔に次に述べておく。

1 クラスの人数は三十人程度であること。

2 教室の広さは、いくつかの小グループに分れて活動するのに十分な空間をもつこと。また、ある程度の広さの庭をもつこと。

3 教科中心に時間が細分されるのではなく、遊びが中心であること。幼児の活動に十分な時間が与えられること。

4 教員は、幼児教育の専門の訓練を受けたものであること。

小学校教育の経験のみであってはならないし、小学校教育の訓練だけでは不十分である。

以上の四点は、五歳児の教育を考えるに当って、幼児自身の成長発達のために、欠いてはならない必要条件である。

いま、論議されている五歳児の行政改革問題が、幼児のために親切なものとなるように、切に望むものである。

教育をこう考える (上)



伊 藤 昇

今日、私が与えられた演題、「教育をこう考える」ということにつきまして、私がおもいつくままに話をさせていただきます。

一、私と教育

私は自己紹介の意味で述べさせていただきますと、昭和六年からの朝日新聞の新聞記者でありまして、三十二年四月月つとめて三年前に停年退職しております。長い間、新聞記者をしていた私が、なぜ教育などということにロバシを入れているか、又、なぜ教育などということに関心をもったか、を一つ聞いていただきたいと思ひます。

私が教育ということを考え出したのは、今から二十一年前、日本が戦争に破れた八月十五日に、私に残る人生があるならば、教育ということを考えて生きていきたいと思ったのです。これには

少し説明が必要なのですが、私は、太平洋戦争の間、日本にはいませんで、ヨーロッパをふらふらしていました。と申しますのは、昭和十五年、朝日新聞でフランスに行けという命令がありましたので、それまで朝日新聞のバリ特派員をしていた渡辺紳一郎さんの後任として行きました。昭和十五年に、アメリカを回りまして、フランスに行ったわけですが、フランスで一年半ばかりして、昭和十六年に太平洋戦争が始まったわけです。その後、フランスはドイツに占領されたので、仕事がしにくいので、中立国のスペインに移ったのです。そして、スペインには四年おりまして、終戦の時には、マドリッドにおりました。それから半年留め置かれまして、昭和二十一年、今から二十年前に、在ヨーロッパの日本人全部と一しょに、ヨーロッパから送り帰されました。その八月十五日、私は、マドリッドにおりまして、そこで、日本の

無条件降伏、自分の国が敗れたということを知ったわけです。その時、私はどうしたことか日本を建て直すには、教育以外にはないのだと考えました。

これにも実は説明を少しつけなければいけません。

それは戦争に敗れたという時に、私は、自分の国が戦争をして、敗れたということから、いろいろのことを考えてみました。なぜ戦争をしなければならなかったかなど、いろいろ考える中に私は自分をふり返ってみて、自分という人間が、非常にひきょうな人間である、権力に対して反抗もできなければ、抵抗もできない人間であったというようなことを、自己反省したというわけです。今申しましたように、戦争の始まる一年半前、私は一人でアメリカを歩きながら、こういう国と戦争をしてはならないと、私なりに考えたつもりでした。しかし、そういうことを考えていながら、新聞記者である私が、戦争をしてはならないということを、一行も書いていないわけです。ということは、後になっていい分けのようですが、書いたところで、その当時、言論統制、言論圧迫ということがある中では、読者の目にはとまらないということもあったわけです。しかし、自分の祖国が、非常に大きな危険にさらされている時に、言論統制があろうと、圧迫があろうと、言論人である以上はいいたいことは、いわねばならぬのだと思います、そういう、勇気というものを欠いておった自分が、かわ

いそうになったのです。そして、そういう、意気地のない人間、自分がどういう環境からつくられたのであろうかということを考えた時に、私は、やはり学校教育の中になにか間違いがあったように思われてなりませんでした。

それは学校教育ばかりでなく、今考えるとおかしい位の、家族制度、家父長制度、一軒の家の中で、父親だけが唯一の権力であり、長男である私にとっては、母親は全然こわくも、恐しくもなかったわけです。父親だけの命令に無条件に服従しなければならなかったというのが、戦前の家族制度でございます。学校教育においては、先生が絶対の主権者であり、先生のいわれることは、たとえ、嘘でも、そのまま覚えなければならなかった。少し極端かも知れませんが、教育は、上から下へつぎ込むだけで、児童の立場からいけば、先生のいわれることは、無条件で服従しなければならなかったというのが、過去の教育だったと思います。その点、今日の教育から比べると、相当の違いがあるわけで、そういう中でつくられる人格というものは、上から命令があったならば、なんでもついていくと、こういう人間が家庭の中、学校教育、さらに、人間が上下関係で結ばれておった日本の古い型の社会の中で、そういう人格が、つくられておったと思います。従って、私、自分自身が、非常に行届かない、思慮のない、勇気のない人間であったと認めながらも、そういう人間がつけられた環境、教

育というようなものを、根本的に改めなければ、日本の再建というものは、できないのではないか、新しい日本が生まれるためには、どうしても、教育のことから変えなければならないというふうに思ったわけです。

特に、私が、教育のことと、それを結びつけましたのは、日本に七年間残しておいた自分の子どもを頭においた時に、この子どもには自分が受けてきたような教育は受けさせたくないし、自分が歩んできた意気地のない人生は歩ませたくないというのが、私のその時の考え方でした。つまり、子どもは子どもなりに自分の意志というものを持って、自分の人生を自分で切り開いて、人生を歩んでもらいたいと願ったわけです。

それで、翌年日本へ帰りまして、新聞社に、日本の再建は教育以外にないから、教育ということを考えさせてくれと頼んで、その頃から教育ということに口バシを入れたわけです。私は、少なくとも家庭においては子どもたちには、この父親に対して間違っていると思ったら、どんな喧嘩をふっかけてもよいし、どんな議論をふっかけてもよろしいと、それでも気にくわなかったら、この父親に噛みついてでもよろしい、自分で正しいと思うことは、どこまでも貫いて行きなさいというふうに教えてきたつもりです。そうしたら、私の理想通りの子どもができて（笑）歯のつよい、噛みついてばかりいる子ができました。で、噛みつくところ

を間違えてすねばかり噛みつくという、すねかじりになったわけですし、どうも、素人の教育論などは意味のないものだった次第です。だから、どうぞ、これからの私の話は、まじめに聞かないように願います。（笑）

二、新教育の歩み

終戦の翌年日本へ帰りました時に、アメリカから教育使節団がきておりまして、あの有名な「mission report」という、アメリカ教育使節団勧告書というものを出して、まあそれと同時に、私は子どもが通っておりました附属小学校に行きまして、新しい教育について教えを受けながら、今日にきております。

第一日に講演をなさった波多野先生や、他の先生方にもいろいろ御指導を願って、なにしろ素人で教育というものを考えるのですからなにかと間違いばかりしています。しかし子どもの学校、その他で、新しい教育というものについて歩くうちに、私気がつきましたのは、日本の子どもを良くするためにはどうしても、母親にしっかりとやらなければならぬということだったのです。父親はどうでも良いということではありませんが、終戦の混乱した中では貧しいながらも、父親は多忙をきわめていたわけで、従って、PTAなどの席へはかならず母親がでたわけですね。私は、そういう母親を見ているうちに、この日本の母親が、

すっかり新しい時代というものを身につけることによって、育てられる子どもたちは、正しい人間になるのだと思ったわけですね。

そのころから私は、婦人団体や婦人グループ、PTAの動きをながめながら、また、お手伝いをしながら見てまわったわけですが、新教育が進み、日本の経済成長の歩調が高くなればなるほど、日本のお母さん方が変になってきちゃったのです。教育に対する母親の構えというものが大きく変わってきているように思えます。いわゆる教育ママという、非常にいやな言葉ですが、見当違いの教育ママというものができていることは、おそらく保育、幼児教育に携わっている皆さまは十分に御承知だと思います。

どうして、そのようになったかと、過去二十年間の新教育の歩みというものをふり返って見ますと、私たちが考えなければならぬいろいろな問題に突き当たります。その一つは、学校が、ある場合には幼稚園といってよいと思いますが、子どもにとって、苦しみになっている、学校へ行くこと、勉強することが、子どもにとって楽しみではないことに、大きな間違いがあるのです。

皆さんご存じの佐多稲子さんにお会いした時、伺ったのですが、佐多稲子さんは、お孫さんが、庭で、お友だちと遊んでいたで、「皆さん、学校はおもしろいでしょう」とお聞きになったら、いたずら盛りの小学校二年の子どもたちが、目をくるくると見合わせて、「学校なんて、おもしろいはずないよな」といい

たそうです。これは私にとって非常に驚異なのです。

私は東京の小学校なのですが、私は小学校へ行くことが本当に楽しみだった。日曜日、親父に頭をなぐられるよりも、学校へ行っている方が、ずっと楽しみだった。学校は、楽しいところだったのです。ところがどうでしょう。皆さん見ていられるいまの子どもたちには、学校が苦しみなのです。どうしてそういうことになってしまったか、それは学校においても、家庭においても、勉強するということの意味が変わってきてしまっている。一口に申しますなら、日本の競争社会と申しますか、入試競争と申しますか、本当に身につけなければならぬ勉強というものがなくなつて、ただ上からぎゅうぎゅうとつめ込まれる教育になってしまったからだと思います。

つまり、日本的な社会現象としての競争社会からくる、特に、有名学校というものに集中する入試制度というようなものから、教育の本筋が、すっかりはずれてきてしまっていると思うわけです。そして、その歪んだ教育観というものの渦の中に、母親たちが巻き込まれてしまっている。本当に正しく人間として幼児を育てるというのではなく、ただ競争に打ち勝っていくだけのための人間形成、勉強というものを押しつけていく。ここに今日の日本の教育の誤りがありますし、新教育が二十年間歩んできて、落し穴にはまっているという感じがしてならないのです。

それには、教育についての考え方が、もう一つ変化していることを見逃すわけにはいきません。

それは、日本社会が、大ざっぱにいつて、戦後前半は戦前への回復の十年間で、昭和三十年前後から、経済成長の時代に入っているわけですが、この経済の成長と同時に、国民の生活水準が上ってきて、戦後では、能力さえあれば、誰でも大学へ行けるというふうな教育制度が変わってまいりましたので、子どもたちには皆大学へ行ってもらおうということになって、猫も杓子もという位に、大学へ行くようになった。そして、大学の方は格差ができて、いわゆる有名大学ができる。そこへ集中する。その為の勉強をする。つまり、教育の機会均等、機会拡大、生活水準の向上ということでは、ただ人間は大学へ行けば良いという誤った考えが二重に写し出されているわけです。そうして、その教育観の中で、母親たちもみくちやになっている。母親は幼稚園に連れてきたところから、この子を天才のようにさせてくれというような願いを持っているのです。このような戦後の教育観に対して、今日は、根本的な変革期にきていると思います。このことは、私の今日の結論のようにして、話を進めたいと思います。

三、日本教育の混乱

日本の新教育を振り返って見ると、あらゆる点で混乱にぶつか

っていると思います。これは私だけの意見ではなく、小学校から高等学校の校長会でも、日本教育が当面しているさまざまな混乱を指摘しています。

幼児教育に関していうと、日本には本格的な行政がないといえると思うのです。たとえば四国においては、徳島は幼稚園が多いが、高知は少なく、代りに保育所が多いのですが、同じ五才児に対しても保育所と幼稚園という別の施設を与えるということに関して、政府はあまり深く考えていないようです。

そのように、幼児教育というところに大きな問題が起ってきている。それに対しては、先日中村文部大臣が思いつきのように、五才からの義務教育をするなどといっていますが、専門家の研究上の改革でなく、幼児教育においては、まだまだ政治家とか、一部の人の思いつきのような点で進められているので、こういう点においては、今日では、根本的な対策が必要だと思っています。

幼稚園については、そのような事情がありますが、小学校について見れば、小学校の校長会において、今日の小学校教育について、次のような正式声明をしています。「今の小学校においては、教えることが多く、先生は疲労困憊している」ということです。

皆さんも御承知の通り、今の小学校の子どもたちの勉強では、質より量の方が多いので、先生方より、子どもたちの方がまいいているようです。小学校の三年位で二つかばんを持って歩いてい

るんですよ。一つには、ワークブックや何かが入っていて、くたくたになっているんですよ。だから、学校なんか、おもしろくないよなーということになるんです。

それより、根本的に教育ということについて考えなければならぬことは、これは後にふれますが、今、子どもに教えてやりたいことは山ほどあります。しかし、学校の先生がどんなに勉強したって、子どもの質問に答えてやれないのが今日です。たとえば、小学校三年の先生がいつていたのですが、今の子どもたちは、アメリカの宇宙ロケットがドッキングすることは、テレビジョンで全部知っていますよ。それを昨日見た三年の子が、宇宙であんなことできるの、どうやってできるんだと聞くんです。先生、とてもこれ説明できるものじゃないですよ。仕方ないから「良く、しっかりと勉強して大学へ行きましょう」とかなんとかごまかしてしまいます。これが今日の学校教育です。

今、ちょうど、ふれたいと思ったのですが、マス・コミュニケーション、新聞、テレビ、ラジオ、映画、週刊誌、また子どもにとっては、マンガ、これは、全部、マス・コミュニケーションです。そのマス・コミュニケーションの影響を全面的に受けている子どもに対して、私たちが受けてきたと同じような教育方法、教育内容に問題点があるわけです。

私たち、大正に、小学校、中学校を終えた人間は、子どもの頃

は、一切マス・コミュニケーションから遮断されていました。子どもは新聞を読んではいけない。映画を見てはいけない。ラジオがようやくはじまった時代です。テレビジョンはもちろんない時代ですから、私たちの時代、または、あなたの方のお父さん、お母さんの時代は、学校で教えらるること、家庭で躰けられることが直結されて、人間形成がなされていたのです。今の教育では小さな子どもでも、誰も教えないことを、みんな覚えてしまっているのです。つまり、現在では、学校で先生に教えらるることと、家庭で躰けられることの他に、マス・コミュニケーションによって、直接に教えられているのが、人間形成の場になっているのです。

暇の方があつたら計算してみると良いですが、六才〜十八才の間、学校で受ける授業の時間とラジオ、テレビ、映画、つまりマス・コミュニケーションにふれている時間を比較しますと、後者の方が長いのです。それが、人間形成に深く影響を与えているわけです。このような傾向がある今日において、明治から余り変らない教育の内容や方法で良いのか、ここに一つの問題があると思います。

次に中学の先生のいい分は「六・三・三制は訂正しなければならぬ。十二才〜十五才の青年前期の子どもたち、大切な思春期にある子どもたちに、わずか三年では、十分な人間形成ができな

い。三年では足りないから、四年にせよ」と主張しているのです。これも、全面的な教育改革の一つの話題になると思いますけれど、確かに、今の中学を見ていると、小学校から入ってきた時から高校の受験の準備に入っています。大切な少年期・青年期を、非常に良く書いているのが、井上靖さんの「夏草冬濤」という小説ですが、これは、男の子の大切な時期について一番良く書いてあります。こういう大切な時期、人間形成の中で一番大切な時期を、三年ではいけない、四年にしろと、中学の先生方はいつているわけですね。

高等学校の段階になりますと、東京都では、特に、学校群ということで騒がれましたが、入試科目三科目にするというようなことは、小、中学校が、高校入試があるために、本来の姿から、はずれてしまっているのです、そのしわ寄せをなんとかしようということからです。東京都では、そういう案が出ているにしろ、とにかく、高校へ入れば、ただ大学の受験勉強をさせることになり、本来の高等学校教育の目的からはずれてしまうのです。

これらは、日本の特徴である、高校入試、大学入試の一連のつながりが、小学校・高校の歪んだ姿を作り出していることを示しているものであって、つまり、こういう点から、六・三・三・四制に対する批判が強くてくるわけです。そして、これが今日の日本の教育の状態だと思います。

また、大学も問題を抱えています。つまり、大学のマンモス化です。受験、受験でやってきた子どもたちが入ったところがマンモス大学です。大きな講堂で、マイクで、教師らしき者がしゃべって、さっと帰ってしまう。質問一つできない。まじめに勉強しようと思う学生ほど、失望しています。今度は語学の授業だと、行ってみたところが、席がない。五十名位の教室に、三倍位、入学許可してあるのですからね。その上、授業料の値上げだなんていわれれば、失望している子どもたちの胸が爆発するのは当然です。これは、私、なにも早稲田についてだけいっているのではなく、今の大学ほとんどについていえることだと思います。

そういうふうと考えてみますと、幼稚園から大学まで、日本の学校制度というものは、もう一ぺん、根本的にやり直さなければならぬところに来ております。

それがちょうど、今、文部省がやっておりますところの、後期中等教育、高等学校年代の教育を変えろということ、教育課程の改訂（これは来年度までかかりますが）これらができたところで、日本が戦後二十年やってきました六・三・三・四制を全面的に変えなければならぬという必要性から、文部省中心に、中央教育審議会中心に、学校制度改正の問題が進められるのでないかと私は思います。

今、述べましたように、ここ数年来というものの日本の教育がい

いろいろと混乱を見せていることから私は、どうも新教育の六・三・三・四制というものが、日本の風土に、うまく根をおろきないということを感じ、また日本の家庭における子どもの扱い方に疑問が出ましたので、五年前に一人で、アメリカの教育の現場と、家庭における子どもの扱い方というようなものを、自分なりに見てこようと思って、一まわりしてきました。さらに一昨年、東南アジアから、アフリカ、中南米、ラテンアメリカ諸国を歩いてきまして、私なりに、いろいろなことを考えておりますが、まず、子どもの扱いということについて、感じましたのは、日本では、子どもを非常に甘やかしているということです。

私の関係している目黒のある幼稚園の先生に聞いたのですが、ある二人の子どもがじゃんけんをしていた。二人ともバーを出す。何べんやってもバーを出す。そのうち一人が、お前ずるいぞ、グーを出せばいいじゃないかといって、相変らずバーを出している。それを見ていた先生が子どもを連れてきて聞いてみたところ、両方とも団地の子で、教育ママさんで、子どもは一番先覚えるのはバーだと、そこで、両親はいつもグーを出してやるらしいんですね。そして、また坊や勝ったと、頭をなでてやるらしいです。これは、あまり笑えない現実があると思うのです。じゃんけんだけじゃないです。他のことにおいても、集団の中に入れば、自分も負かされることがあるんだということを、ちっとも教

えてないわけですね。保護だけです。自分の子に勝たせていれば、平和があると思っているのです、一番不幸な子どもを作っているわけです。つまり、京都の松田道雄さんがいうところの「密室保育」です。外の空気にちっともふれさせない。こういう甘やかしが、日本にあるのです。

アメリカのお母さん方に、子どもをぶつことがあるかと聞くと、大抵のお母さんが、子どもはぶたなきや育ちませんといひます。それでは、あなた方はぶたれた記憶があるかというところ、それはないという。要するに、子どもというものは、はい出した頃から二才位までは、言葉で注意してもだめで、動物的な反射で、物事を教えるより他にないんですね。もう記憶が残るようになる三つ頃からは話し合いでいけるのです。口で注意してやれるわけです。日本では戦後、子どもの人格を尊重してとか、子どもの願いを願いとして、とかいって、いたずらに甘くなったといえないことはないと思います。

それからもう一つ。お父さん、お母さん、先生方が集まっておられる時に、あなた方は、自分の子どもに、どんな人間になってもらいたいですかと質問しました。そうすると、東部でも、西部でも、その質問はよくわからないという返事です。だから、日本では、子どもに銀行家になってもらいたいとか、弁護士になってもらいたいとか、いろいろな願いを親は持っているんだといひま

したら、そんなことは、自分で決めることじゃないかというのです。このところが、私、ちょっと違うと思いましたね。子どもが将来、技術屋になろうと、財界に入ろうと、政治家になろうと、それはその子自体が決めるんだということです。親が何願ったって、そうなるもんじゃない。ただ子どもが、その人生航路を選択できるように、親が、十八才、高校を出るまで、全責任を持つて、子どもの教育に当たるのだといっていました。

ここでは、人によって、解釈が違いますが、日本の家庭では、べたべたかわいがってにおいて、学校に連れてきて、先生よろしく願います。躰けもできていませんでなごといつて試験勉強でもなんでも、学校におしつけてにおいて、うちの子にえらくなつてもらいたいと一生懸命願っているんですね。アメリカじゃ子どもの人格を尊重して、子どもの人生は、子ども自身が決めるんだと、そのところを大きくつっぱねてにおいて、それまでには、木目の細かい躰け、社会人としての躰けを家庭でやっている。そのところが、違う点じゃないかと思ったのです。

それは皆さんが、御専門で、勉強していらっじやると思っていますので、今度は世界の方へ移りたいと思います。

四、世界教育競争時代

私が五年前アメリカにまいりました時は、アメリカが教育改革

に打ち込んでいた時です。アメリカは今も教育改革を続けておりますが、教育の現代化、近代化という言葉は、アメリカの教育界を風靡している共通の言葉です。

そのきっかけは、一九五七年、ソ連の人工衛星スプートニクが打ち上げられた時、アメリカが世界一だと思っていたのが、宇宙科学において、ソ連に遅れをとったところから、全教育界の反省が要望されたのです。どういふ点に教育改革が進められたかと申しますと、第一に科学技術時代に入つて、理科と数学の教育に力を入れるということです。ところが、アメリカにおいても、理科とか、数学を教える優秀な人は教師にはならないで産業界に入つてしまふわけです。従つて、理数教師には、国家で特別手当を出しているのです。まあ、非常に理数教育に力を入れているわけです。それからアメリカでは、イングリッシュの教育に非常に力を入れているのです。つまり、科学教育をする時に、国語が弱かったら、なんにもならないということです。

前東大総長の茅先生も、科学教育をするのに日本語ができなくて、科学技術教育はできないといつておられました。同じことを、ロスアンゼルス の全米教育者協会の大会で小・中・高の先生二万人ばかり集つておつた時に、記念講演をしたカリフォルニア大学の地球物理の若い先生が、開口一番、いっていました。

「どうか、科学技術にすぐれた人を養成しようと思つたらば、イ

ングリッシュだけしっかり教えておいて下さい。へたな理科教育をする必要はありません。あなた方が今教えている理科や物理は明日ひっくり返るかも知れない。今日の科学技術というものは、その位のスピードで進んでいます。それについていくには、しっかりした語学、国語というものを教えておいて下さい」

とにかく、日本においても、訳された古典的な科学技術の文献があるわけですね。それを論理的に読みこなす読解力がなければならぬわけです。また実験、観察をした時に、科学的に正確な文章が書けなければ、科学にならないわけです。どちらかというと、日本の国語教育においては、情緒的な文学的な教育が先にとって、科学的な論理的な語学というものが、日本の国語教育で遅れているのではないかと思います。だから、茅先生の言葉を思い出しながら、私は、アメリカの国語教育というものに、大変関心を持つようなわけです。それから、アメリカが世界を相手に、世界政策を持っている以上当然ですが、外国語にも力を入れていきます。外国語、ロシア語を教えられるような人は、これまた教師にはならないので、特別手当を出して、人員を集めています。次に歴史教育ですが、世界のリーダーとしてのアメリカは、世界の歴史を勉強するのに力を入れています。それから、秀才教育ですが、これはアメリカで非常に急いでいるところです。秀才教育ということは、一定の教育をしている中で、頭が良すぎる子ども、

(私は、これを精薄児に対して精神濃厚児と呼んでいます)そういう子どもの教育をアメリカは非常に急いでいるのです。まあ、そういうことがあってですね、日本も戦後やってきた教育に対して、新しい改革がなければならぬと思います。

以上のようなアメリカのようすを見て、今度は、私は、後進国というものを二年前見て来たのですが、東南アジア、ラテンアメリカ、アフリカの一角を見てみて、はつきりいえることは、世界は教育競争をしているということです。つまり世界教育競争の二つの姿が、先進国と後進国を見た時に、見えるわけです。

一つは、東南アジア、ラテンアメリカ、いわゆる、under developed あるいは progressing country とかいわれる、これから進歩しつつある国へ行ってみますと、義務教育をいかに早くするかということですが、私は、ブラジルの数ヶ所で講演させられました、ブラジルの人たちは、日本があの大きな戦争に敗けたのに、どうして、あのビックリするようなオリンピックができたかという点に感心し、経済成長に感心します。それがみな、明治五年の学校制度を取り入れたためだと思い、明治から百年でここまで来たということに、ブラジルばかりでなく、アフリカでも、東南アジアでも、みんな日本をマークしております。日本の明治にならおうじゃないかと。ところが、私は、日本は百年にこんな努力をしたという話をするのですが、一つだけいえないことがあるので

す。それは、日本は百年でここまで来たのではないのです。

明治五年の近代学校制度を取り入れる以前には、武士の子は、藩校（今の大学）、郷学（郡の学校）そして、庶民には寺小屋があつて日本の子どもはちゃんと勉強させられていたのです。明治の学校二万作る時に、寺小屋は三万あつたんですからね。つまり、近代的な教育の基盤はちゃんとできていたわけです。ですから、あのスタートができたのでしてね。今日の東南アジアや、アフリカなどで見ても、とてもその基盤がないのです。ですから日本の真似をしないなんて、大きな顔をしています。あれはできっこないんです。しかし、賢明な国ならば、明治百年かかったところを、半分か、それ以下でできる方法があります。それは、テレビジョンです。視聴覚教育です。私たちは文字からしか、勉強できなかつたのですけれどね。今のアフリカなんか見ていると、アフリカの母親教育、衛生的な赤ん坊の扱い方など、テレビでどんどんできています。そういうことで、明治百年なんていつている間に、むしろは、二十年で成長するということはありますね。また、メキシコの場合が一番望みがあるのですが、私が五年前に行った時は、乞食がいっぱいいいたんです。それが二年前行つてみると、土木建築が非常に進んでいて、見違えるようになっていんです。それは、ボデーという、UNESCOで有名な人ですが、その人が、全国の義務教育の徹底を図っているのです。今申

しましたように、これらの国々というものは、そのように教育競争をしているのです。

一方、先進国、米、ソ、英、仏、日本も含めましょう。そういった国の教育競争は、ただ一つ、天才的な頭脳をいかにして、早く養成するかということです。今日の科学技術の基礎には学問がなければならぬはずで、その学問が、実際の生活の中に、あるいは技術として生きる場合には、非常に正確な電子計算機などがあるわけで、それができて、また一つ技術が進み、学問が進むというわけです。話はちょっと横道にそれますが、ソ連の月ロケットは、偶然お月さまに当たったのではないのです。ロケットを月に当てるには、東京駅の屋根の上から、沼津駅の屋根の上のトンボの片目に当てる位の正確さを必要とするのですが、それが命中したというのは、電子計算機などによる正確な計算があつたからです。また、電子計算機ばかりでなく、それを命中させるには、その基礎にたくさんの学問があつたということです。そのたくさんの学問を研究してくれる天才を養成するというのが、今の先進国の間の教育競争です。

そこで、日本の教育はどうなければならぬか、根本的に改革しなければならぬ点はどこにあるかということを、私なりに述べさせていだきたいと思ひます。

（つづく）

（日本幼稚園協会主催幼児教育講習会講演より）

幼児の内面生活の理解

田中熊次郎



するのだといえるが、叙述の便宜上、前者から考えてみよう。

一、方法的技術的理解

幼児の内面生活を理解するという場合、それは、何らかの手がかりによって、欲求・願望・興味・態度などの方向、判断や思考の過程、情緒や感情の動き、あるいは、特性や性格の特色などを知ろうとすることを意味する。ところで、そういうことは、容易なことではない。わかった、理解したという時、それは実は、すでに誤解や偏見におちいつていることが多いのである。われわれには、人の心の内面を正しく知ることが永遠にできないかと思われる。それゆえ、理解しよう理解しようと、無限の努力を続けることが、最もたいせつな理解の仕方になるといえよう。

このような理解の仕方に、大きく分けて二つある。その一は、方法的技術的に努力を試みることであり、その二は、一個の人格としてかれを扱う努力である。前者は、非情なつめたい理解であり、後者は、人間的なあたたい理解である。実際には、この二つの努力が適切にからみ合って、ほんとうの理解に接近しようと

人は、自己の心の内面を、表情・身振・言語、あるいは、動作によって外にあらわす。それゆえ、外に示されたものを手がかりとして、内面事情を理解することができよう。このことは、幼児において、かなりの程度まで可能である。というのは、幼児では、その内面事情を抑制したり仮装したりするスキルがまだ身についていないからである。

① 自然的行動観察法

幼児たちの場合、自由遊びの時間は、かれらを理解する最もよい機会である。しかし、漠然とした観察では、誤解や偏見におちいりやすい。なるべく、先入観をすてて、かれらの行動を一定の用紙に記録するがよい。一名につき二〇分位がよからう。幼稚園

では、この方法を、月に一回はくり返す。そうすると、ひとりひとりの子どもの態度や特性が、うきばりのようにわかってくる。

ある子どもは、つねに攻撃的である。かれは、何か欲求不満をひそめているに違いない。ある子どもは、つねに委縮して退嬰的である。かれは、何か恐怖や不安をいだいているのであろう。

しかし、中には、それほど目立たない子どももいる。こういう子どもについては、運動会や遠足などの際に注意して観察するがよい。人間は、危機的場面において、ほんとうの自己をさらけ出す。たとえば、競争・疲労などの場合である。そういう時になると、人をおしのけたり、悪がしこく動いたり、意気地なくなったりする。けんかの場合なども、危機的である。おとなしい子どもが、ある時に、猛然と立ち向かう。根性はしっかりしているといえるかも知れない。

そのほか、食事の際、集団保育の際などでも、観察の機会はある。それらは、前記の観察用紙に、いちいち書きこんでおくがよい。ところで、記録は、客観的な事実を重視し、自己流の解釈をおおげさに附加しない方がよいのである。たとえば、「A、涙を流し、エーンと泣く」と記述すればよいところを、「この甘ちゃんは、愛くるしい両の眼に露のような涙を流して、小羊が狼におそわれたように、恐怖に満ちた泣き声をあげた。家庭で、母親が過剰に愛撫しているからである」といった記述をしてはいけない。それは主観や想像の部分が多過ぎるからである。このよう

に、わかる範囲の事実に限定しようとすることから、非情なつめたい理解というのである。事実以外は、推量であり仮定である。たしかに論断はできないとしておく必要がある。

② テスト法

近頃は、幼児向きのいろいろなテスト類ができている。知能検査はいうまでもなく、欲求不満テスト、性格診断検査などかなり公刊されている。幼児用個別知能検査でも、知能の程度がわかるだけでなく、検査を受ける際の態度や動作を注意して観察し記録しておくがよい。型通りの答え方をする子どももあれば、余計なおしゃべりをする子どももある。保育室ではあまり活動しない子どもが、ゆっくり考えて正確に反応するということもある。知能検査を、ていねいに実施することで、ひとりひとりの幼児の性格の側面までわかるということもいいていい過ぎでない。

また、Q・P・Hなどのプロジェクト・テクニクは、習熟しないとはっきりした判定はくだせないけれども、これを活用して、幼児の特性のいくらかはわかろう。子どもの願望や不満が、物語りの中に示されるほかに、明るい態度ですらすら話すものもあるし、おじけてぼつぼつと話すものもある。

以上のほか、集団の中の幼児たちの相互的な感情関係を理解するには、ソシオメトリック・テストを行なってみるがよい。それには、まず、組別の写真を準備し、その写真を見ながら「お遊びをするとき、いっしょになりたい人はだれか、そのわけ、お遊び

をするとき、いっしょになりたくない人はだれか、そのわけ」などと、順に聞いてみるのである。そうすると、各幼児がおたがい、どのような親和感や反発感をいだき合っているかがわかる。

A児がB児を「しんせつでやさしい」といって選択し、B児もまた「やさしく遊んでくれる」といって選択すると、相互選択という。このような相互選択をいくつも持っている子どもは、人気ものである。これに反して、O児がP児を「すぐおこってたく」といって排斥し、P児もまた「いじわるだ」といって排斥すると、相互排斥という。このような相互排斥をいくつも持っている子どもは、嫌われものである。そのほか、だれからも選択されないで孤立している子どももいる。

ところで、かような内面的な相互関係の分析と、前述①の自由遊びの行動観察の結果とは必ずしも一致しない。たとえば、ある子どもは自由遊びでは集団の中でリーダーのように行動しているが、内面的な相互関係では「どなたたりぶったりする」ということで嫌われているというようなことがある。そこで、かれは、必ずしも信頼されたリーダーでなく、むしろ腕力でみんなを支配しているボス児だということが理解される。これと逆の例もある。ある子どもは、自由遊びでは目立って先に立たないし勢力があるとはみえない。しかし、内面的な分析では人気ものになっていることがある。とするとかれは、潜在的なリーダーであるといえる。

③ 実験的観察法

条件を統制して、子どもを理解しようとする場合は、実験的観察法といわれる。テスト法は、一種の実験といえるが、なお、計画的に小集団の構成法を変化したり、遊びの種類を変化したりして研究する方法がある。精度を高めるには、観察室を準備したり、録音機を用意したりする。このような方法をくり返すならば、かなりの成果がえられるであろう。かれの欲求は何によって阻止されているか、かれの興味は何に向かっているか、かれの特性はどうであるか、なお、A児とB児との間にどのような関係があるか、それに、C児が加わるとどうなるか。かれらは、どの程度に協調できるか。

さらに、サイコドラマやソシオドラマの手法を活用すること、実験法として有効である。たとえば、幼児たちに、かわるがわる父親や母親の役を演技させてみる。そうすれば、かれらが、両親に対してどのように期待し、どのような不満を持っているかが理解されよう。同様にして、教師の役割を演技させて、教師への期待や不満を知りえよう。なお、けんかがどうして起こるか、どうすれば仲よくなるのかなどもわかる。ドラマは、半ばは非現実であるから、反復することができし、ある程度までは危機的場面の状況を再現することができる。

しかし、何れの場合にしても、その精度を高めようとするには、ビデオテープにとり、熟練した観察者が数人で討議しながら、研究をすすめるということになろう。

④ 面接法

以上、多少の技術や設備の必要な方法を述べたが、普通の幼稚園では、困難とされることがあろう。だれでもいつでも行なえる方法は、ひとりひとりの幼児と個別に面接して話し合うことである。この場合、こちらは口数を少なくして聞き役となり、幼児に話しやすい雰囲気を作ることがたいせつである。あるいは、粘土を与えたり、描画をさせたり、絵本をみながら話し合うのもよい。また、気の合う二人を組んで、一緒に面接するという方がうまくいく場合もある。

二、人間的理解

方法的技術的理解は、実は、人間的理解を深めるためである。

つめたい理解とあたたかい理解で、何れが重要かといえば、だれしも後者と答えるに違いない。極端にいえば、保育の効果をあげるには、後者だけでもよいといえる。しかしながら、ほんとの意味の人間的理解に進むには、方法的技術的な研究が必要である。

人間は、自分が理解されたときには、しみじみとうれしいものである。幼児とても、自分を理解してくれる教師に、信頼を寄せ敬愛の感を抱くに相違ない。

世の中にも、観察をくり返し、テストを試み、家庭の調査まで行なって、資料を山と積み上げながら、それで得意然としている教師が少なくない。いかに、計量に苦勞し、立派なグラフを描い

たりしてみても、つめたい分析に終ってしまったのでは、何の価値もないといわなければならない。教師が子どもを観察しようとすれば、同時に、子どもも教師を観察しようとしているし、教師が子どもをテストしようとすれば、子どもも教師をテストしようとしている。だから、意地の悪い観察や難解なテストは避けた方がよい。子どもの側の事情にはおかまいなしの観察やテストは無理解ということになる。

子どもは成長発達の可能性を持つものとして信頼し、かけがえない人格的存在として尊重しなければならない。それが人間的理解である。短所が観察されたとしても、どこかの長所を見落しているかも知れない。あるテストで欠点が見出されても、別のテストで美点が発見されるに違いない。われわれの知りえたものは、子どもの内面生活の一側面でしかないのである。できるならば、長所や美点をさぐりあてるようにしたいものである。

あらをさがしているような、未熟な点のみを強調するような、そういう観察やテストはやらない方がよい。子どもの問題をそのまま受容する理解、子どもの判断や思考の過程を、そのまま生かしながら伸ばそうとする理解がほんとうの理解である。こちらの判断や思考の型にはめこもうとすれば、子どもはむしろその曲解に驚くであろう。「わたしの心の中をわかってくれるなら、わたしはあなたのいうことを聞くとしよう」と、子どもたちはいいのである。

(東京教育大学)

幼稚園の現場において当面する一、二の問題

萬代彰子

幼稚園教育要領が改訂されてから、幼稚園教育課程の編成とか指導計画の作成など、各地で幼稚園の教育計画が塗りかえられたり、新しく作成されたり大変熱心な研究が進められたことは、幼稚園教育振興七ヵ年計画の一環としてまことに結構なことである。

目標をもち、具体的なねらいを打ち立てて子どもたちの望ましい経験や活動が展開される立派な指導計画が用意されることは当然必要なことである。しかしどのような理想的な諸計画を作成したとしても、その指導の方法があやまっておれば何の効果もない、いや害がある場合も考えられる。これはひとえに指導者の力量にかかっていることを考えると、「人が人を教育する」ということを思いおこす。

幼稚園という集団の中で教育という営みがなされる。そのうち子どもをとりまく環境が子どもを支配する大きい力であることは周知の事実である。なかでも人的動的環境としての子どもたちと教師の果す役割が、物的静的環境よりはるかに大きい影響力をもっていることを知っておきたいと思う。

ここに幼稚園教育がスムーズに効果的に運ばれるために用意であってはならない問題として考えられる一、二の問題をとりあげてみたい。

一、生活年齢と学級編成

幼稚園は満三才より就学の始期に達するまでの幼児を教育する学校であることはいうまでもない。従ってどの幼稚園も三才

から五才の子どもを收容するのがたてまえであるのに現状は收容する施設の貧弱さから大部分の幼稚園は就学前一年間を主として收容しているようである。

ここに五才児という同一年齢の子どもの集団ができ、各園の規模や人員の都合で学級編成がなされるのであるが、たまたま学年を異にする年齢の幼児が少数編入された場合は勿論のこと、五才児のみの場合においても、生年月日のひらきの大きままに学級編成がなされている時に問題がある。

(その一)

本園では三才児を一学級二四名を限度として編成していると、生年月日は四月二日から翌年の四月一日に至る十二ヵ月のひらきがある。その間の子どもの発達速度がいちじるしいのでわずか二、三ヵ月の違いでも大いに子どもの成長の度合いにひらきがあるのは当然である。よって三才児の扱いはおのずから五才児と同様には考えられず、集団指導の方法に考慮をしなければならぬ。あまりに子どものひらきが大きいと、春組、秋組とでもして入園の時期をはずしてみてはどうかとさえ思う。

しかし三才児といえども入園後二ヵ月もすると何とはなしに幼稚園という集団の中でおのおのがあるがままの力を出して落ちついた行動がとれるようになり、秋頃には二四名という人数

では少ないと思うほどまとまった遊びが展開されるようになる。そして一年の後四才児の新入児との混合の学級編成をするのであるが、その時期と方法に苦勞している。

(その二)

新入の四才児の中に、すでに他園において三才児の保育を受けてきた子どもが入ってくることもある。すでに集団の生活を経て来たはずのそれらの子どもに限って入園当初に問題があることを発見した。勿論個々の子どもの家庭生活が大きく影響していることであるからたまたまそんな例になったのかもしれないが、何年間かの例で共通して感じられることは、他園で保育を受けた効果が見出せないほど、入園当初にわがままな行動が多いことである。そして基本的な生活習慣が身についていないことが目立つ。まことに悲しいことである。新しい環境にとまどうのは全幼児等しいはずであるから、どこに問題があるのかまことに興味深いものがある。

それは多分その子どもたちは、他に三才児がなく四才児あるいは極端には五才児の集団の中に三才児ひとりが大事にとり扱われ、大目にみすごされ、あまやかされて生活してきたのであるまいか。これらは本当の子どもの欲求が満足されなかったのではないかと思われる。

(その三)

新入四才児と入園第二年目の四才児とを四月のはじめに混成した場合に起った問題は、新入児との中で旧幼児がリーダーシップをとってうまくやれるだろうと考えたのはあさはかなことで、担任教師が新入児に手がかかることにしつと、する気持は生まれのおそい子どもほどつよく、旧幼児の方が問題行動をとることが多くなった。しかも二分した場合にはどちらか一方は学級担任も変るといふ二重の問題点が重なりあつて予想もしないことが起つて困つたことがあつた。

そこで一考したことは、新入四才児と旧幼児とは一学期間平行して、担任も変えずそのままにして、その間に少しずつ子どもたちの交流を考え、二学期から発足する学級編成になれさせ、担任もどちらの組へもなれるようにしてまきつをさけるようにした。

学級編成は、生年月日の順に早い方から六ヶ月を規準にしてわけ、しかも新旧幼児はどちらも半数が入るようにした。

正式の学級担任は原則として生まれのおそい子どもたちの学級をつづいて持ち上がることにした。これは、子どもと教師の結びつきが小さい子どもほど関係が深いために担任が変わつたことによる問題をなるべくさけるようにしたためである。

(その四)

生年月日順に学級編成をして気づくことは上半期に生まれた子どもたちのグループがまことに世話がかからず何事もやすやすとはかどるのにくらべて生まれのおそい子どもたちのグループは、まるで動きがぶく目立って幼い感じがするということ。あまりにもはつきり差がみられることは驚くばかり、ここでもまた発見したことは、幼い学級に入つた子どもたちの中で三才児の時には話すことも少なく小さくなつていたような子どもたちが、思いがけなく活発に話もするし、動きがでてきたこと、これも驚きの一つである。

それは、日々子どもたちが成長してきたという面もあるが、よくみて感じられることは今まで大きい子どもたちに従属していた子どもたちが、それから解放されて自信のある行動がとりやすくなったと思える点である。

今一つ、大きい子どもたちの学級で、ある子どもが幼稚園がおもしろくないといふこと、母親は大層心配したが、これは三才の時から今まで学級内でいばつていたらしい女の子が、新しいグループになつてから思うように自分の主張が通らなくなつたことによるらしく、こんな愉快なことはないと喜んだことであつた。というのは、新しく入つてきた子どもたちは

もちろんのこと同ような水準に成長している子どもたちは、そう簡単にはいいなりにならないのである。

そこに尊い対人関係の経験がたまれていくのである。母親にはよくその理由を説明して大変よい現象であること、大きい意味での成長であることを強調して安心するように話したことである。これこそ生年月日順に学級編成をした意義がじゅう分認められる諸点である。

(その五)

四才児の二学期で決定した学級編成は五才児になってもそのまま同じ担任教師によって受け持たれていくしくみにしていると、いよいよ修了する頃になってもおのずから学級の雰囲気の違い、一面問題がありそうにも考えられるが、それだけにいいよ子どもたちの成長の度合いの違う混合の学級編成よりも、生活年齢の近い子どもたちによる学級編成の方が、幼稚園から小学校の低学年にかけての集団指導に適したものであるという感じを深くするのである。

この信念を持ったまま一九六六年七月十八日から二十三日まで一週間バリにおいて第十一回O・M・E・P世界会議があるのに出席する機会に欧州の幼児教育施設参観のため約三週間視察出張をさせてもらったところ、ケルン(西ドイツ)ウィー

ン(オーストリア)ローマ(イタリア)などの幼児教育施設では、三才から五才あるいは六才と混成であることが常識のようになっているところをみて、いささか妙な感じであったが、それはその学級の幼児と教師の人員との関係、またその指導方法において考えられることであり、わが国の現状からいって、とてもまねのできる話でないことと痛感したまでである。

しかし根本精神において変りはなく、いずれも子どもの自発性を尊重し、個人に徹した教育、生活に根ざした教育、五官の訓練を大事にとりあげている教育——いわゆるモンテッソリー式教育法の訓練を受けた教師が幼稚園の教師になる——など、まことに徹底してなされていることは大いに意を強くしました、参考とすべきことであった。

二、個人化と集団化

幼稚園という集団の中で、子どもたちはどのように成長するかということは、勿論教師の指導力が大きく作用するのであるが、それは子どもたちが自分と大体同じ水準の子どもたちの集団の中に自分の場を見つけないという大事な仕事が幼稚園の生命ではないかと思う。

個々の子どもに具わった能力をほんとうに自分のものとして

出しきらせる、自分を自覚し自分を確立しようとする、本当の意味での個性をつくる場が幼稚園というならば、子どもたちは生活圏を広げる冒険をしたい、なんでも自分でやってみたい、知りたい、つくり出したい気持ちでいっぱいである。どんなすばらしい教師の計画があっても、またその計画に従ってほんとに楽しく遊んでいるように見えても、子どもの本来の要求、自分でやってみたいという満足感を得られないような場面に出くわす。それは五才児に多いと思う。

これらは脳の発達を知り、交感神経、副交感神経などの発達や内分泌の状態などをくわしくしらべると、当然解決されそうな問題がたくさんあるように思う。従って子どもの年齢相応な指導の方法としてこの段階においては学級としてまとまった教師の指導のみが多くなり安易な集団化をいそいではならないように思う。

五才児ともなれば、教師の意図するままに素直に従って、次とすばらしい経験や活動を展開することは楽にできるのである。それらは一見、充実した保育がなされているように錯覚する。この習慣が固定化すればまことに危険とさえ思う。

子どもは与えられる生活に馴れて、自ら求めようとも考えようともしない子どもになりかねない。最近特に幼稚園教育が熱

心にとり扱われ出すにつけその方向をあやまると、その時期をあやまった教育により大事な人間の基礎をつくることにならないのではないかとおそれる。

集団化の前提として自主的な生活、自分で心を働かしていく生活をより多くさせるというのが教師の指導のあり方ではなからうか。

幼児期教育への関心が高まりその重要さが認められる時代が来たことは、まことに喜ぶべき現象ではある。今まで、三才から五才までの間のことは未開拓の分野であっただけに、最近多くの人々がいろいろ研究に着手してこられたことはありがたいことである。

教育学者も心理学者も医学者もこぞって子どもの発達のすべてを明らかにしてもらいたいものである。

しかし心すべきはほんとうに生きた子どもと直接関係の深い現場の教師の素直な子どもを見る目、子どもを知っているその尊い体験こそ大切にしなければならぬと思う。

現実の子どもを正しくつかむことに自信を持たなければならぬ。そのためには学者の研究に耳をかたむけることも大切なのである。

三、子どもの心の五つのねがい

今一つ大事なことは、正しく子どもを知る方法、子どもの成長発達のあり方を、母親に知ってもらわなければならないことである。自然な姿であれば当然伸びるはずのものが、母親も教師もそれをそこねる方向にあやまった教育熱心という邪魔ものがあることである。

子どもは本来のねがいが満足されないと、どのような手だてをしても素直には成長しないものである。問題のある子どもは必ずといってよい欲求不満である。

三才から五才までの子どもたちが幼稚園という集団の中で成長するうえに根本になるのはこの基本的要求は何か、それがどのような形になってあらわれているかを正しく見つけだす仕事が第一であると思う。

学者によっていろいろその基本的要求の分類が違ふかと思うが、①新しい経験をしたい、②成功したい、③仲間がほしい、④愛されたい、⑤理解されたい、などの五つはもっとも適切なわけ方であると思う。

なかでも④愛されたい、⑤理解されたいという要求が満足されない時におこる現象はおそろしいものである。すべての問題はこれによって解決できそうである。

子どもをみれば親がわかり、親をみれば子どもがわかる。これは過言でない事実である。

両親の不和、愛情の欠乏、情緒の不安定は将来とも学業不振につらなる根本問題である。どんなに素質があっても子どもにとってこれほどの不幸はない。それに気づかず子どもに要求する方向を間違っている両親、あるいは教師が多いのではなからうか。

幼児期をあずかるおとなの責任はまことに重大である。世の中で正しく独立させる、世の中で正しく仲間入りさせるべく、心と身体健康にじゅう分気をつけなければならない。それは集団の中で安定して自信がもてる生活をいとませることににより成功するのである。

ここに、幼稚園教育の在り方から当面する問題、一、生活年齢と学級編成 二、個人化と集団化 三、子どもの心の五つの願いのそれぞれが必ずしも別々の問題でなく、みんなかわりあいを持って考えられなければならないこと、それらはすべて無関心であってはならない大事なことであることを、声を大きくして提唱したいと思う。

幼児の心理と教育

—〈1〉—

はじめに

編集部から筆者に与えられたテーマは「幼児の心理と教育」という観点から「幼児教育の現場の発展のために」である。筆者は発達心理学、特に幼児の心身の発達を研究の中心として少し仕事を進めてきたが、「発達と教育との結びつけ」ということに以前から関心をもっており、これを自己の将来の最大の研究課題であると考え思っている。

最近とみに幼児教育の重要性が主張され、家庭教育は勿論のことと集団保育の価値が認識されるようになり、保育の科学化、現代化の声を耳にするようになってきた。筆者自身も発達心理学者の



幼児教育の現場の発展のために

— 領域「健康」について —

田 中 敏 隆



立場から一昨年大阪学芸大学附属幼稚園の教育課程作成の一員として参加し、目下大阪府教育委員会の大阪府幼稚園教育課程の作成に取り組んでいる。これらから得た幼児の集団教育の実際的な面と、発達心理学の研究から得た幼児観と、さらに、一年間文部省在外研究員として英国の幼児教育を心理学的な観点から得た知見を基にして、与えられたテーマに対して前後三回にわたって答えてみたいと思う。

幼稚園教育要領は、徳性の育成に重点がおかれているようにとらえられているが、なるほど幼児の発達特徴からみると、この時期に徳性の基盤が最も形成し易いようで、この時期を逸すると後でとりかえしがかなり困難であることも理解できる。しかし、幼

児の集団保育は、他の領域を軽視してもよいのではなく、六つの領域の力動的な実践によって全人教育をめざすことが肝要である。そこで、六つに区分された領域の内容の指導が、全人教育として幼児の発達にどのような役割を果たすものであるかを中心にして述べてみることにする。

一、健康に関する幼児の特徴と指導

体の 発 育

身体の発達状態を知るために身長・体重・胸囲の三つの指標がある。特に、体重は、発達の著しい幼児の健康状態を知る一つの目安になる。体重の増加が停滞しているようであるならば、親に連絡して一度医師に健康診断させてみる必要がある。ここに、幼稚園、保育所では、毎月一回身体測定を行なう所以がある。

体の発育について、最近問題になっている身体発達の加速現象に関しては、その多くは、学童期からのものである。しかし、七歳児では、かなりの加速度現象がみられることからして、すでに幼児期にもこの現象が存するものと考えられる。

体 型 の 変 化

年齢の推移によって体型は変化していく。年少児ほど、頭部が身体その他の部分に対する割合が大きい。たとえば身長と頭高との割合を比較すると、三、四歳児は五頭身であり、五歳児では六頭身になってくる。このために五歳児になると、重心の位置が三、四歳児に比べて下にさがってくる。このことは、五歳児では活動的な遊びにおいて、ころぶことが少なくなってくる。また、三、四歳児に、巧緻性を要求する運動は、困難であることを示すものである。したがって指導計画では、三、四歳児には素朴な全筋的な運動を含めるようにし、五歳児には、全筋的な運動に正確性・敏捷性、巧緻性などを要求する運動要因と小筋的な運動要因を逐次含めていくことが、身体発達に即した体育遊びである。

脳 の 発 育

脳の発育は、六歳児頃までに急速に行なわれる。人間の身体発育は、頭部から尾部にかけて行なわれる。胎児においても身体の形成は、脳からはじまり、また、誕生後においても、四肢の運動が統御されないうちに頭の統御がなされるといったように、成熟的に脳部の優位性がみられる。時実利彦氏によると、脳の細胞の数は一四〇億あり、白痴や精神薄弱児では数は非常に少ないが、普通児と天才児ではこの数に変わりがない。この脳細胞は胎内で

き、一生涯を通じて増減しない。それで、脳の重量が増加しているときには、脳の中でどんなことが起っているか。それは、脳細胞からどんな突起が伸びて、まわりの脳細胞から伸びてくる突起とからみあいが複雑緻密になってきている。このからみ合いが完成するのが、脳の重量の完成と同様に二十歳頃である。

このからみ合いが六歳児頃までに急速に発達し、人間の知能とともに性格の方向性をもぎざみこんでいくのである。このことは、人格の基本的なものが幼児期にでき上ることを示している。このために、脳の発育の顕著なこの時期に十分に栄養価のある食物を与え、そして、幼児期の子どもに望ましい生活経験を発達上の特質に応じて与えることは、脳細胞から伸びてくる突起のからみ合いを、緻密に、精巧に形成させることになる。それではいったい脳の発育を促進させる栄養として何がよいのか。これには、好き嫌いのない子どもにすることは論をまたないが、新鮮な魚、ビタミンの多い野菜、新鮮な果物、肉類と乳製品を豊富に与えることが必要である。英国人は、日本人に比してカロリーを多くとっており、特に、肉類と乳製品の摂取量の多いことは、驚くばかりである。これは、子どもの場合も同様である。しかるに、英国では幼児児童の肥満型が日本よりも遙かに少ないのは、いたるところに子どもの遊び場があり、栄養と運動のバランスをうまく保って

いるためであろう。

このように人格の基礎になる脳の発達からしても、西洋人に比して劣らない強い体力を育てる意味からしても、その基礎年齢である幼児の栄養についてもっと科学的にメスを入れる必要がある。かかる意味からして、幼児の集団教育においては、給食問題を真剣に取り上げ、この面から全人教育としての幼児の発達を促すことに関心を向ける必要がある。

排泄の習慣

これは、領域「社会」に属するともいえるが、領域「健康」とも関係があるのでここで取り上げた。

一般的に、大小便は三歳児になると一人で処置することができるようになるが、しかし、遊びに夢中になっているともらしたりすることもある。このことは、四、五歳児になると非常に少なくなる。とにかく、幼児期において一人で手洗いにいき、一人でお尻をぬぐえるようになるから、この時期に便所をじょうずに使えるように教育することが肝要である。洋式の便所は、早くから一人で排泄できるような構造をもっているために、英国の子どもは、日本の子どもに比して、一年ほど早く、この面の自立性が確立してきているようである。

食事の習慣

食事の作法は、人間の品を示すものである。そのために正しい食事のしかたを身につけることは、一応ひとりで食事できるようになる三歳児から、教育することが大切である。そして、正しい食事のしかたとか、食べ物の好き嫌いをしない習慣は、幼児の期間中に形成されるようである。

英国においては、人間教育の一つの面として食事作法が重視されている。学校給食は、食前と食後にラテン語のお祈りがあり、食事中は、互に隣り合い同士が小声で話し合いながら楽しく食べる社交的な意味をもっている。幼児には、話し合って食べることは無理であるが、楽しい食事の雰囲気が出るよう十分に考慮されている。特に、学寮における大学生の食事には、全員が黒いガウンを身につけていることを考えると、英国の学校給食のねらいは、どこにあるかよく理解できる。

ある保育学校を見学した際に、他の子どもがすでに午睡の時間に入っているのに、一人の子どもだけが食事していた。その理由を先生に尋ねると、「入学して、今日でちょうど一ヵ月目であるが、わがままで、好き嫌いが多くて食べ残す悪い習慣がある。これを許していると、健康上からも、また、性格形成の上からも本人の

ためによくないから、是非とも今のうちに矯正するのだ」とのことであった。

このように、集団保育においては、正しい食事のしかたと好き嫌いをしない習慣を身につけるように努力することが必要である。

安全に関する認識

三、四歳児頃は、見るものがすべて珍らしく、危険なものもあぶないということがわからない。そのために、それに近づいたり、手に触れて探索したりする。また、手足が一応の自由を獲得するために、あっちこっちに出かけ、時間観念、距離観念がないために、気のおもむくままに歩き回る。幼児の行くえ不明、交通事故、ため池・野つぼにはまって死体となっていることがしばしば新聞に報じられているが、たいていこのようなことから起っている。この年齢では、何が危険であり、どこが危険であるかわからない。自分の意志どおりに危険を感じず行動するから、その都度、危険なものに近寄ったり、危険な場所で遊んだりしないように、この年頃から習慣づける必要がある。

五歳児になると生活の行動範囲が広くなり一人で行動することが多くなる。しかし、交通事故が五、六歳児頃に一番多いことに注目しなくてはならない。これは、一人で登降園したり、一人で

遊びに出かけることによるためである。往来・交差点・大通りを横切るといった場合の歩き方の注意は、いつも実地的、具体的な状況のもとで、反復して指導し、信号機の見方もこの時期に反復して指導すると、それらに対する適応性が身につくものである。

英国では、保育学校と幼児学校において教具として交通知識に関するものが多く準備されている。そして、具体的場面を設定して交通安全についての教育が行なわれている。英国で感心した一つは、車道があれば必ず歩道があることである。そのため、歩行者が自動車によって死傷させられることが非常に少ないのである。もう一つは、保育学校・幼児学校・下級学校といった幼児と児童の学校の校門前に大道がある場合とか、子どもが登下校の際よく利用する信号機のない横断歩道には *zebra* の立札をもった子ども愛護の大人（地方自治体の職員）がいて、子どもを交通事故故から守っている。これらのことについて、日英間にかなりの相違があるが、それを両国の経済力の相違によるものとしてしまえば、それまでであるが、英国には、人間尊重の精神が強く支配していることにわれわれは目を向けなくてはならない。

運動能力

人間の発達、遺伝と環境の相互作用によって行なわれるが、

しかし、能力によっては、より遺伝が強く参与するものと、より環境が強く参与するものがある。運動能力の発達には、確かに遺伝的要因が強く作用する。だからといって、環境的要因を軽視してもよいわけではない。特に、発達が急速で、身体の柔軟性に富んだ幼児期に、運動神経を促進させる環境を与えてやると、運動技能に必要な脚・腰・腕の強さ、敏捷性・巧緻性・正確性は、向上発達するものである。大阪のYMCAで運動能力の劣っている幼児と児童に対して、体育教室を開いているが、子どもはみな運動能力に劣った者同士であるため、劣等感をもつことなく、実に快適に体育遊びに熱中する。期間は半年であるが、その効果はかなりあらわれ運動技能が上達し、同年齢の普通児程度になるものが多い。これも、年齢が若いから環境的效果が強くあらわれるのである。

また、これとは逆に遺伝的に素質をもっている、活動的な遊びが極度に制限されてしまうと、せっかくの素質も伸びないで終ってしまうことになる。このようにみると、幼児期は運動能力を伸ばす絶好の時期であり、将来高度の協応した技能の基礎を身につける理想的な年齢である。幼児は、「よくもあのくらいとびまわって疲れないものだね」と大人が驚くほど活動的に遊び、そして、成功するまで何回も反復する。しかも、遊び場面では冒

陰的であり、怪我に対する恐怖心とか、人にみられているといった恥しさの意識も比較的に少ないから、運動技能が著しく進歩する。ここに指導計画に活動的な戸外遊びを豊富にとり入れる必要がある。日本のように紫外線に恵まれた国では、太陽の有難さは身にしみていないようであるが、英国では、冬を除くと、太陽のでている時の体育遊びは、男女児とも上半身は裸で、紫外線をとりするようにしている。

幼児の時は病気がちでも、成長とともに病気を忘れてしまったと耳によくするが、そのような人の多くは、真に体力をもっているかどうかは疑問である。幼児において必ずかかる病気は別として、戸外遊びできた体は将来においてすぐれた体力の特主になる傾向が強いのである。そのような人の中から世の中に偉大な業績を残す人があらわれてくる。この意味から幼稚園・保育所では、幼児用の運動器具を準備し、晴天であれば、体育遊びは戸外でさせることが大切である。

幼児期は、大筋運動から小筋運動に移る過渡期にあたる。そのために未だに、全身あるいは大きな関節、または、大きな筋肉を動かす第一次的基本運動が支配的である。そこで全筋的な運動である、走ったり、とんだり、高いところに登ったり、とび降りたりする活動的な遊びを好む。そのために、指導に当っては、年少

児ほど全筋的な運動遊びを多くし、運動器具を使用する際にも全筋的に運動できる内容にし、年長児に移るにつれて、小筋的な運動を要求する活動内容を逐次増していくようにすべきである。また、運動の基礎能力が形成されるこの幼児期に、正しい歩行と正しい姿勢の指導を行なうことも成熟にかなった教育である。

幼児の運動能力に加速度現象は認められるであろうか。この点についての資料を筆者はもちあわせていないが、児童期の資料から推定すると否定的である。現在児童・生徒の体力の低下が問題になっているが、これは身体の加速度に対して運動の加速度がなく、この両者の不均衡によるものである。体力の低下はおそらく幼児期から発生してきているものと考えられる。このような意味からも幼児の戸外での体育遊びが重要視されなくてはならない。

以上「健康」に関する発達上の特徴と指導についての概略を述べてきたが、「健全な精神は健全な身体に宿る」という諺のごとく、人間の幸福の第一は、なんといっても健康であるということである。筆者が、英国の高校生に「貴方の望む幸福は何か」と尋ねると、「いつも健康でありたい」といった返答が非常に多かったのである。その健康の基礎は、幼児期に形成されることを考えると、全人教育の中に含める領域「健康」の役割がよく理解できるのである。

(大阪学芸大学)

幼稚園四十年（四）



菊池ふじの

以上述べたようにして、組全体が共通の目的をもつ生活を、先生も子どもも楽しみながら張りあいのある生活をおくったものであった。倉橋先生は私たちが楽しそうに次々と新しい主題の下に生活しているさまを自分も楽しそうに見ていて下さった。そしてときどき仕事場へ出かけていらしたり、保育室の中にはいつていらして、ヒントや助言を与えて下さった。先生はこの保育を誘導保育と名づけられた。この誘導保育の一つとして「人形のお家を中心として」という題で、当時の「幼児の教育」にのせたものを再掲載して導入や活動の過程、子どもたちの有様などを知っていただくことにする。

人形のお家を中心として

人形のお家を中心として保育案を立ててみたいとは、かねてからの久しい念願でありましたが、今度漸く着手してみました。

明けて昨年の暮になりますが先ずはじめに、人形を求めたのてございました。そうたくさんでもない材料費から支出するとしては、かなり高価だったのでございますが、一人では淋しか

ろう、せめて二人は欲しいものと思ひまして、揃えたのでした。今思えば、何も高価なものをわざわざ求めるにも及ばなかったのてでございます。キャラコの布で縫い合せて、その中に綿をつめて、洋服を着せ、帽子を被せ、靴下、靴等を穿かせれば、店で売っております西洋人形に劣らぬもの、しかも却つて味のある、壊れる心配の無いものが出来上つたのてございましたのに。

人形を揃えましたところ、子供達、とりわけ女の子の悦びよ

うは、とてもお話になりません。男の子までが可愛がつて、代る代る代り合つては抱っこをしたり、おねんねをさせたりいたすのです。今まできかん坊で、みんなをかれこれ指図していた女の子などは、人一倍お人形が好きで今まで人を支配していたのが、その関心の全部を挙げてお人形に注ぎますわけで、その気のつくこと、親切なこと、見ていて涙ぐまれる程で、とても今までに見られない美しい光景を現わしたのでございました。

さて或日の午後、お帰りの時間も間もない頃、私は組の子供達みんなに向つてこう申しました。「この二人のお人形さんは姉妹で、昨日アメリカから来たばかりです。お姉さんはメリーさんといい、妹さんはマリーさんというお名まえです。お友達もまだ出来ませんし、お家もあります。おべも今着てるのだけなのです。ほんとに淋しいのですから、これからみんなよく遊んで上げましょうね。それから不自由なものを男の方も、女の方も、みんなで作って上げましょうね」と、そして「どんな物を作って上げましょう。皆さんの拵えて上げたいと思うものいってちょうだい」と。すると今迄お人形さんと遊んでいて、お布団が無くて可愛想だ、といつていた子供達は、いち早く「お布団」といい出しました。それから続いて、お机を、お椅子を、と後から後から細かいものが色々と出てまいりましたが、なかなかこつちの計画にはまってくれません。子供達にとっては初耳の計画なので、予期するこつちが無理なのです。

で私は皆の後に「先生はね、このお人形たちのお家を拵えて上げたいの」と申しますと「そうだね、お家を拵えて上げるといいね」と男の子はすぐ賛成。それから私「そしてね、そのお家、お窓をつけて、カーテンを下げましょう。そのカーテンの模様はみんなで描きましょうね。それからお家の床板に敷く敷物も欲しいの、そして敷物には、みんな考えて何かぬいとりをいたしましょうね」というと、眼を輝やかせていたみんなはコックリとうなずく。それから又、私はつづける「敷物が出来たら、今度はお人形さんのベッドも拵えましょう、それからお机もお椅子も作りましょう。お家が出来たら今度はお庭の方にお花畑も作りたいし、温室も作りたいの。それからお馬も飼いたいし、豚も飼いたいの」と。ここまでいうと、子供等の眼はいよいよ輝いて来ました。それから又つづける「こうしてメリーさん達のお家が出来たら、今度は、メリーさん達の買物に行く町を作りたいと思いますね」と子供達の賛成を求めると、みんな黙つて頭をコックリして賛意を表わす。「その町に、どんなお店を作りましょうか」と申しますと、今度は子供達は競つて答える。

「おもちゃ屋」「お菓子屋」「お薬屋」「ラジオ屋」「お魚屋」「靴屋」「紙屋」「お花屋」

と、なかなか尽きそうもない。いえるだけをいわせてボールドヘ列記して見たのでした。町の相談が一わたり済みしてから、今度は「じゃあお人形さんが町へ買物に行く時に何に乗っ

て行きましようか」と聞きますと、男の子等、吾れ先に「電車」「自動車」と答える。「そう、その電車も自動車も捨てましようね。そういうものは男の方達一生懸命捨ててちょうだいね」といえば、自信ありげな男の子等のうなづき。それから、町が出来たら、今度は、町の郊外に、お人形さんの遊びに行く豊島園のようなものを作りましよう。それから池の組でこしらえていらしたような水族館も作りましよう。森の組でお作りになったあの動物園も作りましようね」といえば之にもまた嬉しげなうなづき。

こうして、みんなと話し合っている中、お帰りの時間がまいりましたので、語り合いは之だけにいたしました。翌朝早く或るお母様は、お子さんを送って見えられて、

「昨日、幼稚園から帰りましたら、子供はあしたまで僕、お人形さんの乗る自動車を捨てて行く約束したから、お母さん何か箱をちょうだいと申します。傍で兄達がいろいろとくさしますので、龍太郎が嫌がり、お母様にだけ手伝っていただと申しまして、昨夜おそくまでかかって作りました。」とおっしゃって、果実箱を利用した自動車を下さいましたのには全く恐縮いたしました。それから同じ朝、も一人のお母様。やっぱりお子さんを送ってこられてのお話に「弘基は、今朝まいます時、僕幼稚園へ行ったら大工さんをして、お人形さんのお家を作るんだから、どうしても板を持って行く、といつてきかないのでございしますが、どういとお話なのでございましようか」と御不

審。こうなつては、徒らに計画にのみ耽つて、ぐずぐずしてはいられなくなりましてので、早速と板や柱を取り寄せて、実行に取りかかったのでございしました。

× × ×

お家は、お人形のお家であると同時に、子供達のお家としても遊べるようにと心掛けて設計しました。

骨組み 高さ五尺、横四尺、奥行き三・五尺、として骨になる柱を組み立てました。柱を直角に切ることとはなかなかむずかしく、ここがうまく出来ませんでした為、骨組みが少し曲り、其の為に出来上ったお家が少し傾いております。計画の始めは、出来るだけ粗に、おおまかにと考えましたので、無論かなな等をかけるつもりはありませんでしたが、子供に木を切ってもらつたり、組立てのお手伝いをしてもらつております中、二、三の子供が、手にとげを刺しましたので、たつた柱の組立てにさえ二、三人のとげを見るようでは、お家が出来上つて、その中で毎日遊んでいるうちにはどんなにたくさんの子供等がとげを刺すことだろうと思ひますとやっぱりかななを掛けの方がいいと思ひましたので、柱にも板にも私共と子供達とで代り合つてかけました。で、幾日かの間は、お室の中はまるで、工務所の仕事場のように鋸屑や、かなな屑で一杯になりました。初めの中は、鋸を持つても、まるで動かせなかつた弱々しそうな子供でも、こうして一週間か、二週間続けておりましたところ、驚く程上達いたしましたので、今では一人残らず自由に

切ったりするようになりました。尤も大工の仕事は非常に力がいりますので、その力の続く時間は至って僅かで、知らない人から見てはなぐさみにちよつといじつてみる程度に思われる程でございます。この仕事では、柱を切ること、かななをかけること、釘を打つこと等を子供達に手伝ってもらいました。

床 柱の組み立てが済みますと、大急ぎで床を張りました。

骨組みだけで置くことは、かなり不安でしたので。ここでは床板の長さを私共が測って線を引き、これを切るのは子供に致させました。釘を打つことも子供等がいたしました。

窓 窓は後と両側の三方につけました。後の窓は横一・五尺、縦一・五尺とし、床から一・六尺のところにつけました。

この高さは、お家としても釣合いがよく、子供を立たせて見ても、ちょうどよい塩梅の高さを求めて定めました。この横の窓に、二枚開き戸を蝶番で固定させてはめました。戸は硝子をはめたような形にしようと思ひ、据え付け前に鋸ミシンで窓枠だけ(板がもろいので、枠は割合に幅広く)を残して切り取りました。それから両側の窓、之も床から一・六尺のところにし、横は柱と柱の間全部を開き、縦は一・五尺といたしました。横はやつぱり、硝子のはまるように窓枠だけを残してくり抜いた戸を二枚蝶番で止めて開き戸といたしました。

それから正面玄関の方は左の柱右の柱各に一尺位の板を打ち付け、この板に二枚の開き戸を蝶番で留めて玄関の戸に致しました。この玄関の戸には、中央より少し高い所(やはりこれも

子供が立つて外を見られる位置)に硝子をはめられるように、梯形の裝飾兼窓といったようなのを作りました。この戸には、ハンドルを両方につけました。窓は硝子をはめる程の頑丈な戸でもなし、又硝子は危のうございます故、セロハンを張って見ました。すると子供達は窓が張られた嬉しさに誰もが一応は触って見、その上とんとんと打って見てよろこんでおります中、あつちが破け、こつちが弛みして、大変に貧弱な姿になってしまったので、この家に心を留めて下さった先生方の智慧も拝借して、今度は人力車の前に張られてあるセルロイドの厚い方のものを、商売人の人に探して貰ってそれを張りました。今度も又、子供等は、好奇心からかなり触って見たり、たたいて見たりいたしますが、只今のところは無事でございます。それから子供はよく鍵を好きだからと思ひまして、どの窓にも、玄関の戸にも、内から鍵をかけられるような金具をつけました。この仕事では、窓をくり抜くことも、硝子を張ることも、ちょっと小細工で、又、安材木だけに、もろくて細工の注意の要るところでしたので、子供達には、戸をはめる蝶番のねじ鋲をはめてもらった位にしました。で、子供等はねじ廻しを使うのがちよつと変った仕事でしたので、競って手伝ひ、又、案外上手にねじ廻しをまわして止めておりました。尤も、鋲を止める穴は私共が予め金具に合わせてきりであけて置いたのでございますが。

壁 この家には壁というものはありません。普通、壁の部分

人形の家が大体できたのでその中でさかんにあそんでいる（昭和七年十月の頃）



は、みんな横に板を張って壁の代りにいたしました。板の長さを標することは私共がいたしました。板を切ることを、打ちつけることは子供達でいたしました。一人が釘を打つ、他の二人位は、板を押えて助けて上げる。次ぎにこの人達が代る代る釘を打ったり、押えたりし合う嬉しげな顔。見ている私までがたまらなく、嬉しくなるのでした。

天井 お家の安定のために、と思って、後へ後へと天井張りを残して置きましたところ、床板が張られた頃から、天井の無いお家は変だと、子供達が語り合っていました。そして私に向って、早く天井を張ってちょうだいとせがむのでした。ここは子供達の届かない所ですので、板の切り方だけ子供達に手伝ってもらって、出来た板を私達で、さっさと張ってしまいました。

こうして一通りの極く雑なお家が出来上がりましたが、人形と比べてあんまり隔り過ぎておりますので、ちょっと考えさせられました。お人形は綺麗なお洋服を着た、可愛らしいお人形ですし、お家は片面だけ、かななかかった極くどげとげしいお家です。そこでお家の外側は何かで塗って見よう、内側の壁紙を貼ろう、と決めまして、塗料や、壁紙の研究にとりかかって見ました。

塗り方 塗料について何等予備知識も持っておりませず、た

かだかエナメル、泥絵具ししか知らなかったのですが、この大きなお家をエナメルでは乾きも悪いし、とてもやりきれないと思ひまして、せいぜいペンキ位のところに見当をとつて、實際塗料屋について当って見ましたところ、ペンキも乾きがあまり思うようでもなく、又エナメルよりは安くつきますが、それにしてもなかなか廉価という段にはまいりませう、当惑いたしましたところ、塗料屋の申しますに、マンノールというものがあつて、之をぬるま湯で溶いて一、二時間もしたら潤らして用いますと、二時間位ですっかり乾き、色もつかず重宝だと教えてくれました。そしてそれ位の大きさの家なら、五十銭の袋一つで充分だと申し添えてくれましたので、之を一つ試して見ることにいたしました。マンノールは粉状で、色も種々ありますが、強烈な色のは無く、みんな胡粉のは入つたような、やわらかいノーブルな色ばかりです。さて、どういう色合にしたいものかと困つておりましたところが「この家に、現実味の無い、フェアリーの住むようなファンシブルなものにするといふ」と、倉橋先生がおっしゃつて下さいましたので、このお言葉にヒントを得、又他の先生方にも見て頂いて、外はクリーム色、窓枠は水色（胡粉の入つた）にいたしました。

こうして塗りはじめたのでございますが、塗ることは、子供は大変によろこびました。塗りたい塗りたい、塗りたい塗らせ

て、塗らせてという声にまたたく間に塗つてしまいました。成程二時間も経たない中によく乾き、乾いたあとで着物につきそうな様子ですけれど、ちつともつきません。玄関の戸も、お家の中の天井もクリーム色で塗りました。こうなりましたら今度は、早く壁紙が貼つてみたくなりました。

壁紙 壁紙の見本を取つて、この家にそぐうような模様色合のを選びました。壁紙の實際研究では、紙質、模様、色合の多種多様あること、それよりも、壁紙を貼る前に、下張りをするものなどということを選びました。下張の紙は、茶色であの包み紙などに用いる大きなのを二枚位貼りました。ここでは、子供等は下張を手伝ひ、上張りは、手際を要しますので私共でいたしました。こうなつてまいりますと今度は、一日も早く、カーテンとカーベットの欲しくなりました。

カーテン 布地は、山の組でアルバムに用いていらした、あの生金巾というのが適當だと思ひ、之を求めて、之にユーゼンクレヨンで模様を描かせ、濡れ布の上からアイロンをかけて（大きいものは蒸す。こうすると色もほんとの色が出てまいりますし、洗つても落ちません）ほんとうの色を出し、周りにミシンをかけ、かんをつけ、カーテン棒に通して出来上りと致しました。カーテンもカーベットの、このお家にとりかかった直後から、とりかかつておりました。はじめは、何か子供等の描

くものからヒントを得ようとして「お家のカーテンをしますから、模様を考えてちょうだい」と申しまして、カーテン大の模造紙に、男の子、女の子とで描いて見て貰いましたが、みんな思ひ思ひの絵を描いて、纏りも連絡も見られませんでした。之も子供らしくていいと思いましたが、その中いい模様に思い当りましたので、その絵を見せて、一単位宛を子供等に描いてもらって、全部のカーテンを描きました。両側と後の窓と三枚のカーテンですので、之を一人残らずが執筆したわけです。海の昆布や、わかめの繁っている中を、黄色と赤のお魚が泡をふきふき泳いでいる模様です。一番下の岩には、うにがたくさんいます。

カーペット 地はスック。でも生地のままでは引立ちませんので、海の組でいつもしていращるように、渋を塗って、茶っぱい、しまった地色にいたしました。これの模様もはじめは、子供達の描くものからヒントを得ようとして見ましたが、カーテンの時と同様で、その中また、気に入った模様を思い出しましたので、このことを子供等に話して了解を求めたのです。絵は、カタツムリが草の中を這ってる絵なのです。毛糸で輪郭を縫い出しただけではあまり印象的ではありませんので、草もカタツムリも、オリブ色の布で輪郭を縫いだしました。(兼、布をおさえるわけにもなりますが)つまりスックの周囲に草を

配り、その上をいろいろの形の(子供によって形が違いましたので)カタツムリが、這っている模様なのでございます。この縫いとりは全部の子供がいたしました。

多い人は十回以上、少ないのでは四、五回は針を持ったでしょう。かえし針で、草や、カタツムリをおさえたのですから、之をいたします時は、針の運びと、布をはずさずに抑えるという両方の働きを兼ねなければなりませんので子供達は、かなり緊張した様子でした。一度教えて上げればよく呑み込んで、二針三針目頃からは独りでどんどん縫って行く子供もあれば、また、幾度教えても、針が進むどころか、見当もつかない方へ飛ぶような子もありまして、なかなか思うようにはかどりません。こうして、漸く出来上った敷物を、釘鋸で、床に打ちつけて止めました。こうして一通り出来ましたお家を「よくなったわね、よくなったわね」といいながら、傍らで黙って見入っている子供を相手に、飽かず眺めておりましたところへ、お通りがかりに倉橋先生が、おいで下すって「ああこの家にストーブがあるといいな。それから、実際の連絡は無くとも、煙突も立つといい」とおっしゃって下さいましたので、なるほどと気がついて、正面後側の窓下に、ストーブを揃えました。

ストーブ 木で、ファイヤーブレースの恰好の枠を作り向側に火の盛に燃えている絵を描いて(破れぬよう、カンレイシャ

に描く) 貼り付け、窓の下にはめ込みました。枠の木は、煉瓦のように塗りました。石炭入も、火箸も十能も子供と私共で作りました。ストーブを置きましたところ、大変に暖か味が出来て、気持ちよくなりました。

煙突は、木で作り、煉瓦のように彩色いたしました。之も子供等が喜んで釘を打ち、彩色も手伝いました。煙突の穴からは煙を出しました。(綿を黒く塗って)

バルコニー 挿入の写真で見られますようなバルコニーを乗せました。之もクリーム色に塗りました。之が出来ましたところ、子供達は一層珍しそうに、たちかわり眺めて、にこにこしておりました。そして、ここへ昇る梯子があるといいな、と申し出る子もございます。それから上はどうなっているか見せてくれと、抱っこして貰いに来る子もあつたりしました。このバルコニーは子供達には、異様の興味を惹きました。家の格好も、之が出来たために、大変によくなりました。

寢具 ベッド、お人形を求めますと直ぐ「おふとんが無くちゃ」と子供も申しますので、とりあえずお布団を作りました。お布団は出来上ったのですが、寝かす場所が思うようでありませんでしたので、何は無くとも先ずベッドをと思い、お家作りにとりかかるとすぐベッドの製作にもとりかかったのでございしました。写真で御覧いただけます、プランコも鋸ミシンも私ど

も。釘を打つこと、塗ることをよろこんで子供達がいたしました。色は胡粉のは入った薄緑色です。お家の中の色の釣合を考えて、この色を選びました。お人形が二人ですから二つ揃えました。椅子、テーブル、椅子は、或る小冊子で見た兎の絵を描き、鋸ミシンでこの絵の通りにひき切ります。この二枚の兎を両臂にし、腰かけと、背とを切つて適當の広さにして打ちつけました。全体の色をクリーム、背の下方に、緑で草を生やしました。兎の耳の真中の線と眼とは、真赤なエナメルを塗りしました。テーブルは一枚板に、板を十字に組み合わせた脚をつけた極く簡単なのです。テーブルの上はクリームと緑の染め分け、脚の部に兎耳を思わせるような薄緑の模様を染め入れて、椅子とお揃いにいたしました。

スタンド 写真で見えていただけますような形のスタンドを揃えました。クリームと緑の染わけです。電池を備えて、電球をもつけられるようにいたしました。実際に電燈がつくのですから、子供達とりわけて男の子の喜びようは、たとえようもありません。あまりの珍しさに、時々スタンドの生存が危ぶまれますので、電池をはずしてかくすこともたびたびです。この他ラジオも、電話もと思いましたが、家の中が狭くなりましたし、その時もなくて、まだ無しでおります。

ポスト 真赤な郵便受函も出来て、お玄関の所にかけてござ

います。英語が得意で、いつもアルファベットをボードへ書いている子供にレタースと書いて貰いました。之れが大変嬉しくて、時々絵を描いたり、字を書いたりしてこの中に入れております。

只今漸くここまで出来上りました。三学期は殆んどこの製作を中心に過ぎてまいりましたし、又子供達は出来ぬ前から毎日このお家を中心にして遊んでまいりました。

「私は大工でございます。今日はお宅のお窓を打ちつけにまいりました」とか「私は左官でございます。お宅の壁を塗りにまいりました」とかいう口上で、お家の中で遊んでる子供達を外へ出して、仕事を進めたことが幾度もございましたでしょう。お家の出来上りました今日は、これも写真のように男の子も女の子も、このお家につづけては、おごぎを敷いたり、お椅子を並べたりして、このお家を中心に遊んでいます。お外へ出ることが少なくて困る程でございますが、やがてはまた飽きる時も来ようとそのままにしていまいりました。他の組の御子さんまでが時々入って来ては、「よく出来たね、これバルコニーかい」等といいながら前から、後から飽かず眺めてくれる姿を見ますと、たまらなく嬉しく思います。或日の午前は、林の組の方からみんなでこのお家に入り込んで遊んで行く時があります。又或日の午後、海の組の女の方がこの中で遊んで過すと

いうふうで、之を見ますと、ほんとに作りがいがあったと今更のように嬉しく思います。併し初めの計画からいえば、まだ、ほんのお人形さんのお家ができたに過ぎません。之から、前に申し述べたようにこの家の花畑、温室、菜畑、庭木、等を入れ、又屋敷の一隅には、馬小屋、豚小屋等をも加えて柵を巡らし、一方に動物を作り、動物園を作り、遊園地も加え水族館も作りたい考えです。更に電車も自動車も揃えてほんとに子供が乗って歩けるようにしたいと思っております。この企ての出来上りますのはおそらく、来年の三学期にもなるかと思われます。このお家を中心に之等のものの描った光景を思い浮べますと、嬉しさに胸が躍ります。

併し茲で、私が自身にたしなめておりますことは、作ることの面白さ、出来上りの喜びに、ともすれば、一人としての子供を見逃し勝ちであるということです。殊にもこの四月からは年長組として、小学校への入学を控えております子供達故、夢々この欠点に陥らぬよう心してこの計画を進めて行きたいと思っております。之が、とりもなおさず私の本年度における保育上の主な計画なのでございます。

(昭和七年五月記)

幼児の創造的活動の指導 (上)

——音楽リズムを中心として——



岡 田 鈴 代

はじめに

幼児たちは、いろいろな経験の中からたえず新しいものを生み出し、また発見する能力をもっています。このような力を十分に發揮することができるような保育ができれば、どんなに素晴らしいだろうと思うのです。

でも私も、実際の保育をしているときは、ともすると急ぎがちになって、何かその場で、はつきりとわかる効果が認められないと、どうも不安で、なにか幼児たちにすまないような気持ちになってしまふことが多いようです。そして、せっかくの可能性の芽をつんでしまふことも、おうおうにしてあるのではないかと思っています。

そして、また何か幼児の全身の中から発してくる尊いものを、みのがしてはいないだろうかという不安にもかられます。

このようなことについて、私は、おもに音楽的な活動につながるものの中から、実践を通して考えてみることにしたいと思っています。といいますのは、音楽となると、とかく技術的な面が脳にきざまれて、教師が前面に出てしまう結果ともなり、一つの形式の中に幼児を近づけたりする傾向がみられたりもいたします。

そこで私は、どちらかといえば、幼児の自由なあそびの中から、音楽リズム的な活動を何とかみつければ、発展させてやれないものかということについて、考えたりいたしました。

もちろん、音楽リズム的な活動の中には、教師が前面に出てしなければならないものもたくさんあります。それはそれとして、私は、自由なあそびの中で、幼児の経験するいろいろなリズムに対する反応や、音に対する反応の中に、幼児の生活や成長にとって、とても大切な経験があるのではないかと思うのです。それでこれから紹介いたします実践は、幼児の生活の中にある音楽

リズムというような活動の記録ということになります。

私は、これらのことについて、幼児の発達にしたがって、四つの面から実践の記録をたどりながら紹介したいと思います。なお、本市の公立幼稚園は、一年保育のみですから、その点もお含みおき下さい。

即ち

- 1 共通の経験から生まれた表現について
- 2 遊びの場から生まれた創作的表現について
- 3 集団的な自由表現の発展について
- 4 総合的な表現の展開について

(一) 共通の経験から生まれた表現について

〈例一〉

六月二日、六、七名の幼児たちは、園庭の桜の木の毛虫の群集をみつけた、早速毛虫をとってきて、机の上をはわせたり、何匹も箱の中にいれたり、砂場で砂を深く掘って坂道といつて斜めにはわすなどして遊んでいました。帰りになると、「ここ毛虫の家」と砂場の穴の中にいれ、その上にそっと板をのせて、さらにその上に砂をかぶせて帰りました。

次の日には、登園と同時に毛虫の冒険ごっこといって、割はしと紙ひもでブランコをさせたり橋を作って競争をさせたりしていました。他の幼児たちがどんな遊びをしていようと、全然無関心

なようすで、あきることなく毛虫がいる間楽しんでいました。私は、このKグループの無心に遊ぶ姿をほほえましく眺めていました。けれども、このグループの幼児たちが部屋に入ってくると、女子グループからは、「あの子たち、きたないに」といって、きかない者扱いにされてしまいました。

そこで私は、このままではと思って、このチャンスをつかまえて、一人ひとりの幼児たちにも、毛虫の観察をさせたいと思いました。そこで、毛虫で遊んでいる幼児たちに、「毛虫の冒険ごっこを部屋の中でもいいわよ、きつとおもしろいよね、お友だちがこわがらないように上手にしてみせて」といいますと、得意顔でいさんで毛虫を持つてきました。逃げるようにして、きたないといっていたグループの幼児たちも、「うちらもみよか」「うんみよか」といいながらよってきました。はじめのうちはしかめ顔をして見ていましたが、しばらくみていますと、だんだん気持の悪いようなようすもなく、じっとみつめていました。

そのうちに、「動き方が可愛らしい」「背中をまるくしてから前足出すに」「口が小さいし、上を向いて動かし」「足がたくさんある」「箸の端までくると、落ちそうになる」「あるところがないで」「あ、またもどってきた」とみんなが口々に話し合っていました。

私はそこで、この場のようすから、自然の教育内容にウェイトをおいて、表現的なものと組み合わせてみたくなったのですが、

そうすることによって、一つのまとまりのある幼児の活動になる可能性もありますが、それでは本当の表現が出てこないということにもなりかねませんので、自然にリズム的な動きが幼児たちの間から生まれてこないかしらと思って、じつとようすを、うかがっていました。

するとＹ児が「毛虫やぞー」といいながら友だちの背中の上を毛虫がはうように手先を動かして、いやがらせをはじめました。

そこで、私はここがチャンスだと思って、幼児たちに共感を呼ぶように、「Ｙ君が毛虫さんになったわ」というとＹ児はさらにいろいろな毛虫のまねをはじめました。

○床の上をはう。

○頭をもち上げて、左右に首を振る。

○二人、三人とだんだん友だちの後に連なつてあるく。

など、簡単な身体表現でしたが、そのようすがとても毛虫に似ていました。他の幼児たちも徐々に参加して、お友だちの表現と毛虫とをみくらべて、「Ｙちゃんたちの首を振るところがおもしろい」と友だちの動きをみて楽しんでいました。

このように、自由遊びなどの折に十分観察させることから出発して、その物の動きをまねる模倣的な表現から、徐々にみて感じたこと、考えたことの表現へと発展させてやることは大切だと思っています。

この実践例は、教師と幼児との感情的なかわりあいが動機に

なっていますが、幼児は、どのような行動にせよ、教師が自分の行動や感情を受け容れられたと感じたとき、よりよい表現をするのではないだろうかということの一例を示したものと思います。ですから音楽リズムの指導においても、このような行動面からの発展性は、他の活動と同様もっとも基本的な問題ではないかと思っています。

〈例二〉

六月九日、この日は、朝から雨でホールでの遊びが盛んでした。男子数名が「でんでん虫になつてはってんの」といつてマットや平均台の上をはいまわっていました。

そのうちに、平均台の上を、

○ひざ立てであるいている。

○腹ばいになつたまま屈折しながらはう。

○手足を引込め巻員に入つた感じをする。

○平均台の横の面に顔をやつたりして、頭を動かしながらはう。

など、いろいろな表現をしているのです。

私は、このような幼児の活動をみていますと、なんだか、この自発的な活動を契機にして、幼児の気持や考えをもっと自由に表現させてやりたいような気持にかられ、もっといろいろな表現ができるように、平均台とマットの間にはしごをかけてやりました。このような配慮で表現はさらに発展しましたが、リズムを入

れたら、どのようなだろうか、もっと発展しないだろうかと思つて、文務省唱歌の「でんでん虫」の曲をピアノで弾いてやりました。すると予想していたように、楽しさが増し、身体の動きがいくらかリズムにのつてきました。しかし遊具を媒介としているだけに、動きにアクセントがみられませんでした。

そこで和音の利用を思い立ち、ドミソの和音がなったら、頭や手足を引込めて巻員に入つた動作を、ドフラがなったら、頭や、つを出して動き出す、ミソドがなったら、お友だちの「でんでん虫」と話をするなど約束して、和音遊びを取り入れてみました。すると「でんでん虫」の表現とおりまぜて約五〇分位の長時間遊ぶことができました。他の組の幼児たちもこの遊びに入ってきましたのでホールはいっぱいになりました。

そこでどこにこんなにも幼児たちの気持を満足させるものがあったのかしらと、いろいろ考えてみました。このような遊びは、どちらかといえば、原始的な身体的リズムを中心とした遊びかもしれませんが、でも、幼児たちにとっては、とても熱中して遊べるらしいのです。

このような、幼児たちの感情を大切にしながら、身体の中から出てきたリズム反応を大切にしてやることは、音楽的な成長の基礎を養うものではないかと思うのです。

(三) 遊びの場から生まれた、創作的表現について

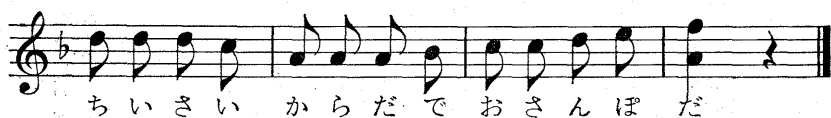
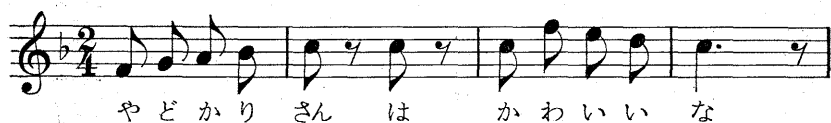
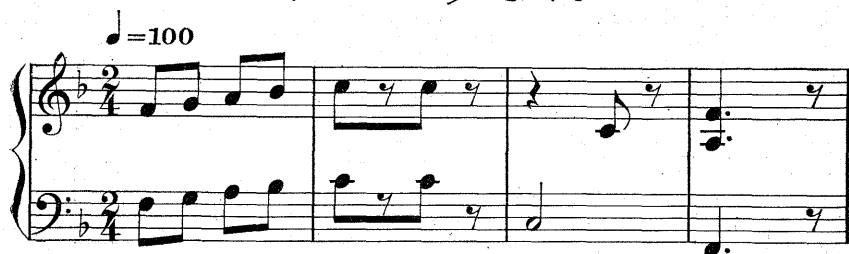
〈例一〉

六月二十日、T児は、登園と同時に日曜日の経験（海での貝とリ）を早く教師に話したいらしく、収獲のえものを手にして、（蛤、やどかり）塩水も別のビニール袋にいれて、「先生、これ海へ行つてとつてきたの、この水なげやな、あかんに、もっととつたけどな」と得意そうに話しかけてきました。

「そう、どうもありがとう。もつてくるの大変だったでしょ」「ぼくが水槽に入れてあげる」T児はこの小動物に愛情がわいているのか、大事そうに両手で、やどかりをかばうようにしていれました。熱心にみとれている友だちもいかにもおもしろそうです。やどかりが小さい巻員から足をスウーと出し、リズム的に、タ、ゝ、とあるく格好にしばらくみとれていました。時々指でさわると急いで引込めますが、また出して、タ、ゝ、とあるきます。私は思わず声をあげて、「わあ！ かわいいわね」といってしまいました。

他の友だちに収獲した時のようすなどを想像させたくて、「T君、どんなふうにして、とつたの」と聞きますと、「ぼくが貝掘ったんだな、そしたら横の方の砂の中から、もぐもぐと出てきたん」「ほんと、びっくりした」とF子、「ううん、ぼくがとつたんだよに、小さいカニさんもおつたに」T児の話をうなづくように聞きながら、あきることなく眺めている幼児ら、一つのものに熱中している姿をみることができました。そして、幼児たちの顔をみ

やどかりさん



たとき、笑みをうかべ、T児がやどかりをかばう気持と同じように、他の幼児からも愛情の高まりを感じることができました。このような雰囲気の中から、何かが生まれてきそうなものを感じとりましたので、私は、「やどかりさんの歌を作ってあげて」と話しかけると、「フフフ」と笑いながら「ラララ」と首を振りながらH子はハミングをしました。H子は、すこしずつ言葉にしているようにした。

他の幼児たちも、それぞれ口の中で何かを断片的に口ずさみ出しましたので、ハミングしているメロディを二度ぐらい弾いてやりますと喜んで合唱しました。そして、「これ、うちらが作ったやに」といって自分たちの歌として、クラス全員喜んで口ずさむ姿をみることができました。

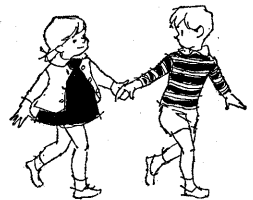
私は、すこしヒントをあたえてメロディをまとめたと思いますが、この歌をいつまでも喜んで歌っている幼児の姿をみてそのままにしておきました。

幼児がうれしい時や遊びに夢中になって興にのった時などに、創作的な表現の芽えがみられるのも、こんな時だと思い、些細なこれらの経験を大切にしてみとめてやり、次への意欲を伸ばしてやりたいと思いました。

以上のように、何となくやるせない、そしてまた、これでののだという安心感のおりまぎった気持の一学期もすみました。

小学校一年生の学校生活(三)

香 川 英 雄



いままでの内容として、第一回には

一、一年生の生活時間の実態

二、幼・小教育課程との関連

三、一年生の学習内容と指導(Ⅰ)について、第二回には

三、一年生の学習内容と指導(Ⅱ)

四、一年生の生活指導

についてすすめてきたが、今回は

五、道徳・特活・行事等の内容と指導

六、一年生の学級経営

などについて、一年生の学校生活を紹介しながら、幼・小連絡の意味をまとめていくことにする。

五、道徳・特活・行事等の内容と指導

1 道徳の内容と指導

・道徳の指導計画(表一)と道徳時間の展開例(表二)

戦前の修身科は全国一律のものであったが、現在の道徳指導計画は学校ごとに、その学校の児童の持つ環境的特質に立って、道徳指導要領に示された指導内容(三十六)を盛りこんで立てられたものである。

2 特活の内容の指導

一年生の特活は週一時間の「学級会」の時間である。戦後設定されたこの時間は、こどもの自主、自発的な活動を尊重したもので、自分たちの学級内外の問題をこどもたち自らがとりくんで解決していくことを意図している。学級会の内容として、話し合い活動(表三)・係り活動・集会活動の三つがあるが、自主・自発的にとりくませるとはいっても、一年生では教師のリード分野が

卒業式	ひなまつり・学芸会・春分の日	3月	立春	節分	始め式・かきぞめ展・成人の日	12月	たすけあい・防火デー・冬休み	三文化の日・七夕・勤労感謝の日	旬間・運動会	都民の日・体育の日・交通安全	敬老の日・秋分の日	始業式・作品展	おぼん・夏休み	入梅・七夕祭・おぼん・夏休み	虫歯予防デー・時の記念日・父の日・入梅	5月	記念日・こどもの日・母の日	始業式	入学式	関連主要行事
尊敬感謝	節度節制	(17)(14)	創意くふう 時間と尊重	向上心	自主自律 信頼友情	(19)(26)(6)	個性の伸長	寛容心・公德心	(23)(32)(18)	健康安全 正直誠実	(10)(1)(21)	創意くふう 公共心・公德心	(32)(12)(10)	公共心・公德心	(32)	(1)(5)(6)	(29)(25)(29)	(1)(26)	健康安全	指導内容(番号)
どうもありがとう	わがまましない		くふうしてみんなで べんきななりました	二わのつるしかり ことしもしつかり	しつかりしましょう		しろのけが ちびとのつば	じぶんのちから まいごのボーイ いいよのボーい	だれがこわしたの	じゃうすとつばのみず だれがこわしたの	えんそく うすつきともし りすこととまち	みんなのすいどう もののでいれ	あぶないあそび ものをたいせつに	じかんのまほう のをたいせつに	おかあさん みんなさん	きまりをまもる こうつうのきまり	健康安全	健康安全	主 題	
絵・よみもの	スライド		絵・よみもの	絵・よみもの	スライド		絵	スライド	絵	絵	絵	説話	絵とよみもの	絵	スライド	スライド	スライド	絵	おもな指導法	

表二 (道德時間の展開例)

12 月	主 題	ちびとのっば	資 料	スライド	「ちびとのっば (学研)」
指 導 内 容		(19) 個性の伸長	(15) 明朗快活	おもな指導法	スライド
主 題 理 由 定	<ul style="list-style-type: none"> ・入学以来 8 か月、学校生活にもなれてきたが反面気ままな言動におちいりやすい。この時期に友だちに目を向けさせたり、自分のことにも気がつくようにしたい。 ・興味をもっているスライドに、てごろなものがあったので、これで考えさせたい。 				
ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちのよいところに気づき、自分のよいところにも気づかせる。 ・明らかなごやかに、はきはしした行動ができるようにする。 				
	指 導 過 程	指 導 上 の 留 意 点		備 考	
展 開 例	◇導入 ①友だちや自分のことで気づいたことの話し合い ◇展開 ②スライドをみる ③みた内容を話しあう ・らくだのよいところ ・ぶたのよいところ ・おたがいに相手のよさに気づく ④友だちや自分のことについて同じことがないか話しあう ・友だちのよいところ ・自分のよいところ ◇まとめ ⑤これからの気持ちを発表しあう	①気づいたことをいくつか話せる程度でほりきげない ②スライドの見方をおしえる ・どんな動物が、どんな話をしておたがいにどうしたか ③でてきた動物、らくだとおぶたをおさささせる ・らくだの特徴や利点は？ ・ぶたの特徴や利点は？ ・おたがいによいところがあることに気づかせる ④具体的に日ごろの友だちのよいところ、自分のよいところ気づかせる ⑤これからの気持ちを短い文や口答で発表させて、意欲づけをする		②スライド約 8 分 ③らくだとおぶたの切り抜き絵 ④事前にかかせた文 ・自分のよいところわるいところ ⑤ノート利用	

表三 話し合い活動の事例（45分）

ぎだい	川上くんのびょうきみまいをしよう
だした人	山下一郎
だしたわけ	びょういんでさびしがっているから、おみまいをしてあげたい
しかい、記録	先生
話しあいのめあて	川上くんがよろこんでくれるおみまいのしかたを話しあわせる
話しあわせる内容と、順序	<ul style="list-style-type: none"> ・話しあいの方法はグループか、個人がいいか ・グループで相談させる ・いつみまいにいくか ・人数はどのぐらいか ・よろこんでもらう方法は？
きましかったことと話しあったこと	<ul style="list-style-type: none"> ◇みまいの日と時間 <ul style="list-style-type: none"> ・こんどの土曜日の午後 ・学校でまちあわせていく ◇人数 <ul style="list-style-type: none"> ・グループからひとりずつ6人と先生 ◇おみまいのもの <ul style="list-style-type: none"> ・みんなのてがみや絵 ・お花
先生の話	お金をかけないでも、本当によろこんでもらう方法を考えること、病院の注意
みんなの反省	話しあいのとき、きいていないでおしゃべりが多かった人、ききたい人があつめなかった人、おきな意見がでてよかった

どうしても大きくなる。

係り活動は、毎日の学級生活に必要な仕事に気づかせてこどもたちにできることを分担させてとりくませている。（後述学級経営の事例参照）

集会活動は、誕生会のおいおい会が中心となって月に一度ずつもたれるものが多く、七夕まつりとか、クリスマス会とかまめまき会などがおもな内容で、歌ったり・合奏・クイズ・紙芝居・も

学校行事等のおもな内容	
・諸検査 ・諸訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・儀式 ・学芸的行事 ・保健体育的行事 ・遠足 ・学校給食 （その他の行事） ・朝礼 ・大掃除

のまねなどの番組が多い。

3 行事の内容と指導

一年生が学校行事等と関連の深いものからあげていくと、給食・朝礼・退避訓練がある。

よろこばれる行事等としては、遠足・運動会・映画会・おはなし会・学芸会・音楽会・展覧会などである。学校給食もよろこばれる中でも最たるものであるが、活動部面からみても行事等の中ではもっとも関連の深いものであり、当番活動として全員が交代で四日に一度ぐらいのわりで経験する分野である。食前の手洗いや食卓づくり、もりつけや配膳、食事の仕方、あとかたづけなど教育の土台としての尊い生活学習や躾などを実践的にくり返す貴重な領域である。しかも子どもたちは、喜

喜としてこの当番をつとめるのである。自主・自発性がしぜんに体得されるよい機会であり、食事のマナーや、協力・明朗な社会性の培養にも、また偏食は正、健康増進にも指導のくふうが発揮される。

六、一年生の学級経営

学級経営とは一口にいうと、学級担任が自分の学級の児童に対

して、広範な教育内容の全領域を「むりなく・むだなく・むらなく」おこなう経営とくふうや努力である。

学級経営の内容としては、

・学級集団の経営

・環境の経営

・学習指導

・生活指導

・家庭との連絡

などがあげられているが、この中から幼・小連絡に関連性のある実践例を紹介してみる。

1 学級集団の経営面としてのくふう

⑦座席の配置のくふう

入学当初の二人ひとくみの一斉授業の形態も、理科や図工などの作業学習が多くなるにつれてT字型の六人ひとくみの形態にしたり、四人ひとくみのグループの形態になったりする。とくに給食の時間はグループの形態にしてすすめることがよろこばれる。

二期には、教師の指定でなくすきなもの同士でくませて、しかも男女のバランスがとれるグループづくりをすすめている。作業学習以外は、話しあいながらすすめることが多いのでコの字型にしているが、声の小さい一年生では話がいかに聞きとりやすく、しかも話し手のようすが見えるので効果的である。

⑧当番活動や係り活動をすすめるくふう

週一時間の「学級会」の時間を核にして、始業前と帰りのわず

かの時間も利用して、学級でのこどもたちの活動を促進している。学級生活に必要な給食当番や、いろいろな係りに気づかせて児童のできる仕事を分担させている。しかし、つい忘れがちになるので写真のように、さかさまになっている係りのカードを作って、活動の促進を計っているが、このアイデアはいままでいろいろなとりくみの中でも効果的で、しかもてがるに作成できるので、おすすめしたい。

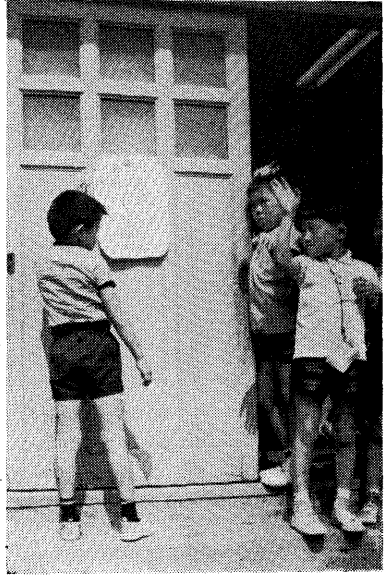
⑨学級目標の実践化をすすめるくふう

五分とか十五分の休み時間が終わって、はじまりのベルがなくてもなかなか一斉に教室に入れない。また入室できたとしてもざわざわして身勝手な言動がつづくことが多い。学級の目標の一つの「きまりよくすすんでやる子」を実践化させるためには、ただ

かかりのカード



はじまりのカード



いい聞かせるだけでは果たされなかった。子どもたちと話し合っ
て「ベルがなったらすぐにすわって本をよむ」ことを約束して、
写真のように「はじまり」の係りを設けるといふ具体的な手だて
をすすめる中で、はじめて実践的態度が習慣化され、確認化され
るようになった。学級集団のまとまりも、カード利用などの具体
的な、自主的な活動を促進する中で実ってきた。

2 学習指導と生活指導のむすびつき

本来、園児も一年生も絵やマンガやテレビ以上に、自分で本を
読みたがっているのである。一年生も大半が入学までに字が読め
るようになってきているし、知らない字はすぐに覚えようとする
意気込みが強く感じられる。じっさいに入学当初、すでに読字力
の個人差には相当に開きがある。

文字指導、読む指導のポイントは一字一字せ・ん・せ・いとき
りはなしたものでなく、「せんせい」というまとまりとして感じ
とり理解させるものである。そういった意味で、本来的なこども
の求知欲や興味欲を土台にすえて、まとまりとしての読み、文字
指導を総合的に展開する方法として読書指導を特別に計画してす
めている。

●読みきかせる中でおもしろさをわからせる

絵本やマンガやテレビ以上に、文字の本がおもしろいというこ
とを、原作を読みきかせることを積みあげの中で、こどもの実感
として感じとらせるようにしている。毎朝始業前の10分の話し合
いの時間に「いやいやえん」「エルマの冒険」などを読み通して
いる。こどもたちは「先生がよむとだいがかわったようですごくお
もしろい」「がっこうにくるのがたのしみ」「こころのながさう
つとしていいきもち」「あさ本をよんでくれるとよくべんきよう
ができる。ふしぎだな。先生はまほうをつかえるのかな」という
ようにいきいきとしてきたし、教師が読んであげた本はもうじぶ
んたちで読まないのではないかとという予想とは逆に、組の二割ほ
どの子が親にせがんで買ってきてじぶんで読んでいたのである。
これは、子どもたちは自分では文字の本のおもしろさがわからな
いことを物語っており、読んでもらっておもしろさがわかり、自
分でも読まないではおられなかったということを意味している。

だから、文字の本の「おもしろさ」をわからせるには、読みきかせることが他のどんな方法よりも効果的で大事だということを証明している。

●読む本のがかりをはっきりもたせる

毎朝読みきかせる継続の中から「本のおもしろさ」をわからせることと並行して、これだけは読もうという具体的な目やすを、こどもと親と教師と三者一体でとりくむことが大事である。

これは文字指導とか国語の学習指導というだけにとどまらず、学習指導の根底になるものであり、しかも余暇利用の生活指導ともなっているもので、個人の力量に応じてどんなことでも可能性をひき出し伸ばし育てていくものとして意義深いものである。

3 家庭連絡のくふう

平生の家庭との連絡は、すって配布した「れんらくぼ」を連絡袋に入れて、こどもを通してやりとりをしている。

また、毎週土曜日に「一ねんしんぶん」を配布して次週の学習予定・行事・連絡事項などを知らせている。

このほかに、毎月一度学級PTAを開いて授業参観をしたり、その後懇談をしている。（学級PTA予定表）（表四）

なお、学期ごとに学校独自の通信簿を作成して、学習については学級内の児童全体との相對評価を、54321の五段階で評定しており、行動や性格の記録は個人についての努力や発達の状況

おもしろい・おもしろい、たのしい・たのしい本です

一ねんせいと二ねんせいがよめる本です

（よんだら、うすくいろえんぴつでぬってみましょう）
（かしたこ、かりっこをしてとんどんどんでいきましょう）

あふりかの ふくいんかん 200	こびとくつや ぼおらしや 280	あんでいお ふくいんかん 420	ぞうの こみねしよてん 330
いそつぶ ものがたり かいせいしや 320	三びきのこぶた ぼおらしや 280	いたずら きかんしや 350	たろうの おでかけ 280
いっきゆうさん ぼおらしや 280	しずかな おはなし ふくいんかん 280	いやいやえん ふくいんかん 450	ちいさいおうち いわなみ しよてん 150
おかあさんの たんじょうび いわなみ しよてん 150	ちびくろ・ いわなみ しよてん 150	おじいさん こぐま ぼおらしや 330	ひとまねこざる いわなみ しよてん 150
おつききなし たべたはなし ぼおらしや 330	ちゅうと ゆうかん せんちようかん ふくいんかん 350	おばあさん だいに としよん 390	ふしぎな たけのこ ふくいんかん 200
おやゆびたろう のぼうし ぼおらしや 280	つくえのうえの じつぎようかい にっぽんしや 320	かにむかし いわなみ しよてん 150	ほしになつた りゅうのきば ふくいんかん 400
きかんしや いわなみ しよてん 150	つる おんがえし しよがくかん 280	しなの五にん きようだい ふくいんかん 300	まいしやとくま ふくいんかん 280
ききみみずきん いわなみ しよてん 130	ねごとおるがん こみねしよてん 330	じゃつくと まつのき ぼおらしや 280	もりの ふくいんかん 280
こどものすきな かみさま ぼおらしや 330	ねむりひめ ふくいんかん 450	しようほうじ うしやとぶた ふくいんかん 280	ゆきむすめ ふくいんかん 200
こねこのびつち いわなみ しよてん 150	はなのすきな うし いわなみ しよてん 150	しろくま そらをとぶ こみねしよてん 330	りようかんさん ぼおらしや 280

おすすめしたい本

【子どもの本二〇選】

無着成恭著 福音館書店 五八〇円

四才	五才	小学一年
きつねと ねずみ 福音館 200	いやいやえん 福音館 350	おかあさん だいすき 岩 波 150
おおきなかぶ 福音館 200	かもときつね 福音館 200	ひとまねこぎの じてんしゃにの るひとまねこぎ 岩 波 各 150
ちいさなねこ 福音館 200	てんからふっ てきたたまご のはなし 福音館 200	マーシャと くま 福音館 170
かばくん 福音館 200	ゆきむすめ 福音館 200	オンロックが やってきた 福音館 200
おやすみなさ いの本 福音館 250	きつねの よめいり 福音館 200	とんだ ドロップ 福音館 200
たろうの ばけつ 福音館 200	三びきのくま 福音館 170	おしゃべりな たまごやき 福音館 200

四才	五才	小学一年
たろうの ともだち 福音館 200	あまがき 福音館 300	やまなしもぎ 福音館 200
あかずきん 福音館 200	でてきて おひさま 福音館 200	てんぐのこま 福音館 60
三匹の仔ぶた 福音館 200	こねこの びっち 岩 波 150	かさじぞう 福音館 200
七匹の仔やぎ 福音館 200	いたずら うさぎ 福音館 60	ちびくろ さんぽ 岩 波 150
三匹のやぎの がらがらどん 福音館 200	たぐーとの 一日 福音館 200	ぞうさん ばばーる 岩 波 150
とらつく とらつく 福音館 200	ビー うみへゆく 福音館 200	かにむかし 岩 波 150
のろまな ローラー 福音館 200	とんだよ ひこうき 福音館 200	ピカ君 めをまわす 福音館 200

四才	五才	小学一年
きしゃは ずんずん やってくる 福音館 60	消防自動車 じぶたー 福音館 200	きかんしゃ やえもん 岩 波 150
もりのなか 福音館 220	やまの きかんしゃ 福音館 60	ふしぎな たいこ 岩 波 150
どうぶつの 子どもたち 岩 波 150	百まんびきの ねこ 福音館 180	ねむりひめ 福音館 350
まりーちゃん とひつじ 岩 波 150	がんばれ さるの サランくん 福音館 60	たなばた 福音館 200
しずかな おはなし 福音館 200	おおきな カヌー 福音館 200	うちゅうの 七人 きょうだい 福音館 200
こびとの おくりもの 福音館 200	くりひろい 福音館 200	うさぎの耳は なぜながい 福音館 300
こまどりの くりすます 福音館 200	かいたくちの みゆきちゃん 福音館 200	ふしぎな たけのこ 福音館 200

表四 学級PTA予定表

月	関連行事	予定話題
4	・始業式 ・入学式 ・身体検査 ・父母会	・一年生の学校生活 ・学級PTA組織づくり ・こどもの健康について
5	・春の小運動会 ・遠足 ・PTA総会	・遠足について ・学習の内容について
6	・衛生週間 ・歯科検査 ・父親参観日 ・入梅	・つゆどきの衛生について ・しつけの問題 ・学習のしかた、させ方について
7	・プール開き ・父母会 ・終業式 ・夏休み	・通信簿の見方について ・夏休みの過ごし方
9	・始業式 ・夏休み思出の会 ・父母会	・夏休みの反省 ・運動会について ・二期の学習内容
10	・運動会 ・校外学習 ・読書週間 ・父母会	・校外学習について ・読書について ・授業参観の授業内容と学習指導について ・家庭学習について
11	・映画会 ・授業参観	・二期の生活と学習の反省 ・冬休みの過ごし方
12	・たすけあい運動 ・父母会 ・終業式 ・冬休み	・三期の学習内容 ・冬休みの反省
1	・新年祝賀式 ・始業式 ・書初展 ・父母会	・授業参観の授業内容と学習指導について ・学芸音楽会について
2	・授業参観 ・学芸音楽会	・一年間をふりかえって ・新学年の心がまえと準備
3	・終業式 ・卒業式	

を文章記述するようになっていく。身体の記録はたいいていの学校で保健簿として別になっており、定期身体検査や歯科、レントゲン検査のつど家庭に連絡をしている。

また、これまでにあげた家庭連絡のほかに年に一、二度家庭訪問をして、こどものことで困っていることや、学習や遊びなどについて直接話し合うようにしている学校が多い。

三回にわたり一年生の学校生活を紹介してきたが、このへんで幼・小連絡の希望の一端をのべてまとめにかえることとする。

● 幼から小へのステップの高さ

直接的な生活経験を豊かにすることに力点のかかる幼稚園と、文字教材の多い間接経験の分野の多い一年生では、文字指導をどうするかが問題である。一年生ではじめて文字を指導することと文字教材中心の学校生活という二面はせつがちで無理である。

読める程度の段階を幼稚園後期でとりあげることが、今日幼児の心理や発達の上で矛盾するとは思われないし、事実本校入学児のほとんどがひらがなの読める状態である。

● 話し方の基本の一貫的な指導の不足

生活や学習の基底としての「意志表示や伝達」の「話の仕方や技術」について、一貫的な指導が不足していないだろうか。意志表示や伝達ができないために、経験する内容や質の深さのひろまりにまでなるのである。

(港区立白金小学校)

幼児における運動機能の発展 (三)

篠崎謙次



五 前 転

1 手をついて前転する

三才で男六〇%女四〇%であるが、四才になると女児は男児においつき、それぞれ八〇%前後に達している。すなわち四才で大多数のものができる種目でありそれほどむずかしいものではない。五才になってもそのびはわずかに五%増加しているにすぎない。つまり前転は四才で完成し四才でできないものは五才になっても成功するものは少ないと考えられる。一般的にいて男児がすぐれているがその差はわずかで、女児にもこのような全身的な大筋運動がほぼ男児同様にできることを示している。

2 つづけて二回前転する

一回の前転よりも率は低下しているが発展の傾向は同じようなすじ道をたどっている。三才児は足があらなかったり頭がつか

第 1 表 (手をついて前転する)

	3 才			人 員	4 才			人 員	5 才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	60	15	25	20	83.8	4.8	11.3	352	89.5	6.1	4.4	1178
女	40	8	52	25	78.3	10.1	14.5	337	83.0	8.2	8.8	1114

要領 マットの上面に両手をついて前転する

- ・まっすぐにまわられたもの……………+
- ・横に倒れたもの……………M
- ・一人ではまわれないもの……………-

えたりして問題にならないが、四才では急激な進歩を示している(六五%)五才で男児は八〇%のものができるようになり、女児は七〇%の成功率である。二回連続前転では女児がかなりおとるのではないかと予想されたが、実際調査の結果は男児に比しそれほど大きな差は現われていない。

前転動作の要約

1 前転は三才でも約半数のものが成功している(女児は少し劣る)わりにやさしい動作で

第 2 表 (つづけて二回前転する)

	3 才			人 員	4 才			人 員	5 才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	15.0	25.0	60.0	20	64.0	2.0	32.0	50	80.2	6.3	13.5	1158
女	12.0	20.0	68.0	25	65.7	2.8	31.4	35	70.6	8.1	21.4	1072

要領 マットに手をつき1回前転したら止まらないですぐ手について2回目の前転をする。

- ・二回完全にできたもの……………+
- ・二回目が不完全なもの……………M
- ・一回目しかできない……………-

ある。できない半数のもの

は、大部分腰の位置が低いため足をはね上げてみすぐにおちてしまう。腰を高くすると足をはね上げることができない。

い。

2 四才では以上の点が改善され足・腰が勢よくあがり成功率は八〇％に達する。しかしまだ頭・首・肩を固くしているの、背中から倒れおちるようになり易い。

3 五才児は率の上昇はあまりみられないが、一般に首

や肩、背中をまるくして柔軟にまわることができる。

4 二回連続前転は三才児にはむりである。四才で急激に進歩するが、一般的に成功するようになるのは五才児である。

5 前転は一般に女児より男児の成績がよいが、しかしそれは小差である。

六 懸垂の動作

懸垂動作では、

- 1、懸垂ぶらんこ
- 2、えび懸垂
- 3、片あしかけ懸垂
- 4、片あしかけ振り
- 5、両あしかけ懸垂
- 6、両あしかけてばなし
- 7、跳び上りうで立懸垂
- 8、うしろ下り
- 9、前回り下り
- 10、あしぬきまわり
- 11、背向きひじかけ振り
- 12、逆上り
- 13、中ぬき腰かけ
- 14、あしかけ上り
- 15、あしかけ回転
- 16、うで立回転
- 17、背向きひじかけ回転

などを調査した。そしてここでは、同一年齢の中で早生れのもの(四〜九月)をAとし、おそ生れのもの(十月〜十二月)をBとして両者の比較検討をも考慮することにしたのである。いまそれらの結果について項目ごとに述べてみよう。

1 懸垂ぶらんこ

低鉄棒にぶら下って軽く振るといふ動作はごく簡単な動きであるように思われるが、実は幼児にとってそう簡単なものでない。四才では半数以下、五才でも七六％ほどしか成功していないのである。三才児はわずかに男八％女一八％台で女児の方がすぐれている。できかかっている中間的なもの(M)を入れれば女児はさらに％が上昇する。四才になると男児は女児においつき、男四五％、女四六％とほぼ同数にこぎつくが、M項ではやはり女児の方が一〇％ばかり多くなっている。五才では成功率は男女同数(七六％)となり、M項は男がまさり、両者を総合すると男児が若干女児をぬいている。四才から五才にかけて男女ともかなりののびを示しているが、しかしまだ八〇％には少し足りない。

第 3 表 (懸垂ぶらんこ)

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	8.7	4.3	86.5	23	45.7	26.7	27.6	116	76.2	17.3	6.6	226
女	18.5	14.8	66.6	27	46.7	36.7	16.7	120	76.3	11.7	12.1	223
A	7.7	7.7	84.6	13	37.9	37.9	24.1	58	81.6	11.0	7.3	109
B	10.0	0	90.0	10	53.4	15.5	31.0	58	71.0	23.0	6.3	117
A	29.4	17.6	53.0	17	40.3	45.2	14.5	62	76.5	10.4	13.0	115
B	0	10.0	90.0	10	53.4	27.6	19.0	58	75.9	13.0	11.0	108

要領 低鉄棒(頭の高さ)にぶら下って軽く前後にふる

- ・ 2 回ふれれば……………+
- ・ 1 回ふれれば……………M
- ・ 全くふれない……………-

つぎに上欄の A・B 群(早生れとおそ生れ)についてくらべてみると、この種目では男児は A・B 両群においてその差は僅少であり、成功率では三、四才の B 群の方がむしろよい率を示している。しかし失敗の率も高

いので一般的にいえばやはり A 群の方がまさっている(M 級が多い)といえよう。五才になると A 群が急速にのびて(八一%) B 群(七一%)を追いこしている。

女児は三才で A 群の成功率が二九%に達しているに反して B 群は 0 である。ところが四才になるとこの率は逆転し B 群が一挙に五三%に進出して A 群(四〇%)を追い越している。しかし失敗率も高いことは男児と同様で、必ずしもおそ生れが成績がよいと断定できない。五才では A・B 両群の成績は接近してその差はほ

第 4 表 (えび懸垂)

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	—	—	—	123	21.9	34.1	43.9	123	36.1	46.2	17.6	229
女	—	—	—	121	23.1	35.1	44.6	121	40.4	41.7	17.8	225
A	—	—	—	58	20.6	29.3	50.0	58	36.1	46.3	17.6	108
B	—	—	—	65	23.1	38.4	38.4	65	36.1	46.2	17.7	119
A	—	—	—	62	20.9	29.0	50.0	62	43.2	39.0	17.8	107
B	—	—	—	59	25.4	35.5	38.9	59	37.4	34.8	17.8	114

要領 低鉄棒に懸垂し、両足を伸して水平以上にあげて静止する(鉄棒の高さは肩の高さ、以下同じ)

- ・ 水平以上にあげて静止する……………+
- ・ 水平以上にあがるか静止できない……………M
- ・ 水平まであがらない……………-

ほとんどなくなっている。
要するに懸垂ぶらんこの動作は三才では問題にならず四才で約半数、五才でかなりのものが(七六%)成功するようになる。男女差はほとんどなく、早生れとおそ生れでは四才でおそ生れののびが目立ち、五才では早生れがのびて優位に立つが両者の各年齢を通しての全体的な差はわずかである。

2 えび懸垂

この運動は懸垂して膝を伸し、えびのように両足をあげるののでえび、などとも呼ばれている。強度に腹筋・脚筋などの力を必要とする意志的努力的な動作である。四才での成功率は二〇%、五才でも四〇%近辺である。四才で M 級が三四%、五%とかなり多い(五才でも四〇%を越え

第 5 表 (片あしかけ懸垂)

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	34.8	4.3	60.8	23	49.1	15.0	35.8	120	85.3	8.9	5.8	224
女	44.4	22.2	33.3	27	68.0	14.8	17.2	122	87.2	7.6	5.4	224
A	38.5	7.7	53.8	13	62.1	15.4	22.4	58	89.6	74.7	2.8	107
B	30.0	0	70.0	10	37.1	14.5	48.4	62	81.2	10.3	8.6	117
A	47.0	23.5	29.4	17	77.4	14.5	0.8	62	93.0	2.6	4.4	114
B	40.0	20.0	40.0	10	58.3	15.0	26.7	60	80.9	12.7	6.4	110

要領 鉄棒に片あしをかけて懸垂する

- ・膝までかかっておら下る……………+
- ・あしがさわるが膝までかからない……………M
- ・あしが棒にさわらない……………-

三才男三四%にたいし女四四%でその差一〇%ほどに見えるが、M級をみると鉄棒に足のふれるものの数が男児にきわめて少なく女児にかなり多いことが知られる。これはもう少しのところで成功できるものが女児に

る)にもかかわらずその割に五才の成功率があまりのびていないのは、この運動のむずかしさを示しているとみてよい。

A・B両群についてはあまり明瞭な差はみられないが、四才では男女ともにいくらかB群がよく、五才では男児は同率となり女児はA群がいくぶん追い越している程度である。

3 片あしかけ懸垂

あしをかける動作は全体として男児よりも女児の方が成功率が高い。とくに三才と四才では女児の成績が男児をしのいでいる。

多いことを示している。したがって不成功(全然だめ)のものを比較してみると男児は女児の倍になっている。そしてこの傾向は四才児になってもつづいている、その成功率は男四九%、女六八%で男女の差はさらにひろがり、女児はますます優位に立っている。ところが五才では男児は急速に女児に追いつき、その差は僅少(男八五%、女八七%)となっている。五才児では鉄棒にあしのさわらないものは、男女ともわずかに五%である。

あしかけ上りの基礎である「あしをかける」動作は、右にみたように男女とも五才でないと完成しないが、女児は四才でかなり完成に近づきつつあるといつてよからう。

A・B両群の差をみると、全体的にB群はおくれており、とくに四才でのおくれが目立っている。これは四才でA群がよくのびているのにB群があまりのびていない結果である。五才になるとB群は四才のおくれをかなり回復している。したがってこの種目では男女ともおそ生れの成績が劣っており、五才でおおむね早生れに追いつくがまだ一〇%内外の差をのこしている(A約九〇%、B約八〇%)。女児A群は四才で七七・四%を示しこの種目では四才女児がかなり進んでいることをあらわしている。

4 片あしかけ振り

この種目も各年齢とも女児の方が成功率が高い。とくに四、五才で男児をリードしていることが目立っている。

しかし、あしをかけて振動することは、身体全体が空中であお

第 6 表 (片あしかけ懸垂)

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	13.0	18.5	65.2	23	27.5	27.5	45.0	120	59.5	26.6	14.2	225
女	18.5	33.3	48.1	27	40.2	30.3	29.5	122	73.4	17.9	7.2	223
A	15.4	30.8	53.8	13	62.1	15.5	22.4	58	67.0	25.0	8.0	112
B	10.0	0	80.0	10	37.1	14.5	48.4	62	52.0	27.4	20.3	113
A	17.6	41.1	41.1	17	77.4	14.5	0.8	62	72.3	16.5	6.1	115
B	20.0	20.0	60.0	10	58.3	15.0	26.7	60	72.2	19.4	8.3	108

要領 鉄棒に片あしをかけぶら下って体を前後に振る(あしの
かからないものは補助してよい)
 ・勢よく2回ふれば……………+
 ・1回しかふれないもの……………M
 ・2回ふれても勢なく振幅貧弱なもの……………-
 全然ふれないもの……………-

むけになって振動するので、かなりの巧緻性と決断とを要するのでその成功率はかなり低いものである。四才男二七%、女四〇%、五才男五九%女七三%で五才でも八〇%に達していない。前項の「片あしを鉄棒にか

第 7 表 (両あしかけ懸垂)

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	30.4	0	69.5	23	72.5	5.8	21.6	120	80.5	7.3	12.3	220
女	51.8	11.1	37.0	27	81.0	7.4	11.6	121	88.6	12.3	8.5	236
A	38.5	0	61.6	13	71.9	5.3	22.8	57	86.5	8.7	4.8	104
B	20.0	0	80.0	10	73.5	6.3	20.6	63	75.0	6.0	19.0	116
A	58.8	17.6	23.5	17	79.7	10.6	9.4	64	86.7	2.4	11.0	127
B	40.0	0	60.0	10	82.5	3.3	14.0	57	90.8	3.7	5.5	109

要領 鉄棒をにぎった両手の間に両あしを入れ膝をかけてぶら下る

・両膝をかけてぶら下る……………+
 ・両あしが棒にふれるかあし首がかかる程度……………M
 ・片あしが棒にさわる両あしともさわらない……………-

よりもむしろ成功率が高いのである。女兒では三才で五一%四才で八一%となっており比較的容易にできる種目である。他の懸垂種目(いままでみてきた)と同じように女兒はどの年令においても男児に優っている。男

い。五才になると逆にB群ののびが著しくA群は停滞しているといつてよい。男児は五才でもまだおそ生れに追いつくことはできないでいるが(五二%—六七%)、女兒は完全に追いつている(両者とも七二%)。一般に女兒ののびが著しいことがあらわれている。

5 両あしかけ懸垂

鉄棒に両膝をかけてぶら下る動作は、幼兒にかなりむずかしい種目であろうと思つていたらそうではなかった。片あしかけ懸垂

女ともに四才の伸びが飛躍的でありとくに女児は四才で大部分のものが成功（八一％）している。男児は四才で七二％、五才になって八〇％に達している。

A・B両群の比較では三才ではB群が劣るが四才でB群ののびが著しく、男女ともA群を追いぬき、女児は五才になってもこの関係はかわらない。男児五才ではB群ののびは停滞して再びA群が優位に立つ。このことは女児の方が早生れおそ生れのハンデキヤップを早くばん回しているといつてよいだろう。この場合女児は四才ですでにハンディを解消し男児は五才にもち越していると解釈できる。

6 両あしかけ手ばなし

五才児で男四五％女五五％で約半数しか成功していない。かなりにむずかしい種目である。したがって三―四才では一〇―二〇％のすぐれた少数のものしかできない。片手をはなせるものを加えても五才児七〇％であり、幼児期において大部分成功することはむずかしい。

ここでも各年齢を通じて女児の方が成績がよいのは、女児にも静かな冒険心とか細心の注意をはらった決断力というようなものが高いことを示していると思われる。

早生れとおそ生れをみると、ここではないままでの種目にみられない差があらわれている。三才でA群は男女一五―一七％できるものが、B群は〇、四才でもA・Bの差は大きくB群が著しくお

第 8 表（両あしかけ手ばなし）

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	8.7	4.3	86.5	23	15.9	13.9	70.5	122	45.2	23.0	31.6	221
女	11.1	11.1	77.7	27	24.0	10.7	65.2	121	55.2	19.7	25.1	223
A	15.4	7.7	77.0	13	23.7	15.3	61.1	59	50.5	24.3	25.2	111
男 B	0	0	100.0	10	7.9	12.7	79.4	63	40.0	21.8	38.2	110
A	17.6	11.8	70.6	17	30.6	14.5	54.8	62	60.1	19.5	20.4	113
女 B	0	10.0	90.0	10	16.9	6.8	76.3	59	50.0	20.0	30.0	110

要領 鉄棒に両あしををかけ両手をはなし逆さにぶら下る

- ・両手をはなし逆の姿勢になる……………+
- ・片手だけはなす……………M
- ・片手もはなせない……………-

とっている。五才になつてはじめてB群ののびは急速になりA群に追いついてきているがまだ一〇％ほどの差を残しているのである。

7 跳び上り
うで立懸垂
この動作では三才、四才の成功率はあまり差

はついていない。しかし四才ではMの数が多くなっているのも、どうやら棒上に身体を支えられる数からみれば、四才児の方がかなり多くなる。五才で成功率は急激に上昇し、男女それぞれ八〇％前後に到達している。したがってうで立懸垂は五才にならないと大部分のものにこなせない。

男女ではやはり各年齢とも若干女児がすぐれている。生れ月の関係では各年齢ともあまり差はないが概して早生れがよい率をなしている。

第 9 表 (跳び上りうで立懸垂)

	3才			人	4才			人	5才			人
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	30.4	8.7	60.8	23	33.9	22.9	41.1	112	79.0	7.8	13.2	219
女	37.4	14.8	47.8	27	45.0	25.0	30.0	120	84.2	5.9	10.0	221
A	30.8	17.4	51.8	13	38.8	12.2	49.0	49	87.1	4.9	7.8	102
B	30.0	0	70.0	10	28.6	34.9	34.0	63	71.8	10.3	18.0	117
A	44.8	29.6	25.6	17	48.4	21.0	30.6	62	87.1	5.2	7.8	116
B	30.0	0	70.0	10	41.4	29.0	29.3	58	81.0	6.7	12.4	105

要領 地上から鉄棒上に跳び上ってうで立懸垂になる(棒の高さ胸の位置)

- ・胸を起して支える……………+
- ・胸を屈して支える……………M
- ・支えられない……………-

8 うしろ下
四才児で約半数のものが、成功し五才では八〇%を越している。どの年齢においても中間的な「ずりおちる」ものはきわめて少ない。十と一との両方にわかれていのがこの種目の特徴である。

ある。つまり棒上から軽くとび下りる過程において「ずりおちる」段階は必要ないといえるだろう。やはり五才児ののびが急速で、ここで成功しているものがかなり多い。男女差ではこの種目もまた各年齢とも女兒の成績が男児にうまわっている。五才で男児がかなりのびているがまだ女兒に及ばない。A・Bの比較では三才児のB群が男女とも五〇%でA群をはるかにしのいでいるが、これは三才B群にたまたまよくできる子どもがいたということであろうか。調査人員が少ないためこのような結果があらわ

第 10 表 (うしろ下り)

	3才			人	4才			人	5才			人
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	30.4	8.7	60.8	23	44.6	12.3	43.1	130	82.8	6.5	10.7	215
女	47.4	14.8	44.4	27	55.4	6.6	38.0	121	88.0	2.7	8.5	222
A	15.4	15.4	69.3	13	55.2	5.5	34.3	67	90.0	3.0	6.0	101
B	50.0	0	50.0	10	28.6	19.0	52.4	63	76.3	9.7	15.1	114
A	32.2	26.7	41.1	17	60.3	7.9	31.7	63	92.3	0.9	6.8	117
B	50.0	0	50.0	10	50.0	5.2	44.9	58	84.9	4.7	10.4	106

要領 うで立懸垂の姿勢から地上へ軽くはずみをつけておりる

- ・はずみをつけて軽くおりる……………+
- ・ずりおちる……………M
- ・おりられない……………-

9 前回り下
れたものであろう。A・B両群では女兒よりも男児の方がその差がはなはだし。この種目でみるかぎり生れ月による能力差は、女兒よりも男児の方により大きくあらわれてくるということができる。

前項のうしろ下りにくらべて前回り下りの方がかなりにむずかしい動作であるといつてよい。とくに三才ではうしろ下りが三十四〇%成功しているに反して、ここでは問題にならないほど成功率は低い(男四%女一四%)。これはうしろ下りがそのまゝの姿勢で下りるのに反し、これは頭を下にして身体を一回転し逆さの姿勢を通過しなければならないからである。

四才で成功率は男二〇%、女四五%であるが、中間級(M)のも

第 11 表 (前回り下り)

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	4.3	0	95.7	23	20.5	36.9	42.6	122	70.5	15.2	14.3	217
女	14.8	11.1	74.6	27	45.0	23.4	31.6	120	70.5	14.3	15.2	224
A	7.7	0	92.3	13	25.0	31.7	43.3	60	76.4	13.7	8.8	102
男												
B	0	0	100.0	10	16.1	43.2	43.2	62	65.2	16.5	18.3	115
A	23.5	17.6	58.9	17	53.3	23.3	23.3	60	74.5	14.0	11.5	114
女												
B	0	0	100.0	10	36.7	23.3	40.0	60	66.3	14.5	19.1	110

要領 うで立懸垂の姿勢から前に回って下りる

- ・回って下り鉄棒の前に立つ……………+
- ・回ってあしが鉄棒の前方におちる……………M
- ・回って下りられない……………-

のがかなり多い
ので進歩は著し
いとみてよいで
あろう。それが
五才になるとM
級のものが減少
し十が男女とも
七〇%に上昇し
ている。かなり
の獲得率である
がまだ八〇%に
及ばないので五
才で完成すると
いいきれない。

三、四才では女兒の成績がかなり上まわっているが五才で同率
になっている。四才―五才へかけての男児のび率は急激である。
生れ月のちがいで、はつきりその差があらわれている。三才
ではA群にはわずかでも成功者はあるが、B群は〇で一人も成功
者はない。四才でもかなり差があり五才で大分差はちぢまってく
るが、それでもなおB群は一〇%前後A群におとっている。同じ
おそ生れでも女兒は四才でかなりA群においつき、男児は五才で
急速においついていることが示されている。

第 12 表 (あしぬき回り)

	3才			人 員	4才			人 員	5才			人 員
	+	M	-		+	M	-		+	M	-	
男	18.5	4.3	78.3	23	57.0	6.6	36.4	121	57.1	15.5	27.4	219
女	29.6	0	66.6	27	64.3	11.7	25.0	120	64.8	12.1	23.2	224
A	30.8	7.7	69.3	13	58.6	6.9	34.5	58	69.2	13.5	17.3	104
男												
B	10.0	0	90.0	10	55.6	6.3	38.1	63	46.1	17.4	36.5	115
A	29.4	0	64.7	17	62.9	17.7	19.4	62	73.6	14.9	11.3	114
女												
B	30.0	0	70.0	10	63.9	5.2	31.0	58	55.5	9.1	35.4	110

要領 ぶら下った両うでの間に両あし、腰を入れ回って地上に下りる(前、うしろどちらに回ってもよい)

- ・まわって地上におりる……………+
- ・あし腰を入れてまわるが地上に下りられない……………M
- ・あしが両うでの間に入らない……………-

10 あしぬき
回り
この動作は三
才児で二―三
才児で二〇―
%前後でき、
比較的簡単なよ
うにみえるがそ
のび率はあま
り香しくない。
四才では五〇―
六〇%のものが
成功しているが
五才児は四才児
と全く同じ位置

に停滞している。これはいかなる理由によるものであろうか。調
査上の不備があったものであろうか。それともこの種目は五才児
にあまり興味なく練習されないで発展しないのであろうか。いず
れにしても理由がはつきりつかめないのも再調査が必要である。
A・B両群は四才で男女ともほとんど同率になっているが、五才
ではA群が若干のび、B群の率は四才児のそれよりもおち込んで
いるので、A群の優位が目立ってきている。このような変則的な
あらわれも五才児の進歩停滞がすべて原因していると思われる。

生活の中に園芸を(二)

浅 山 英 一



三、植物はどうして土に育つか

植物が育つということは不思議なことです。大ていの植物は、地面の上に、つまり土の中に根を張って育っているわけですが、どうして土に植物が生えなくてはならないのでしょうか。

丈夫な草花は人手をかけなくても、こぼれだねが土に落ちてひとりで育って花を開き実を結んでいきます。一たい、土のどこに植物を育てる力がひそんでいるのでしょうか。

土が、何故植物を育てることができるか、それを考えてみましょう。

(一) 土には水分がふくまれている。

雨がふればしみ込み、川水は土の下から毛管現象によって吸い上げられて地下水でいつもうるおっています。

(二) 土には植物に必要な養分がふくまれている。

土中の肥料成分は植物の栄養の半分をまかなっています。それは土そのものに各種のミネラルがあつて水にとけ出し、長い間に動物や植物の死んだり枯れたりして腐った成分、つまり有機質の成分がふくまれています。

(三) 土の中には空気が通っている。

空気として酸素が土の中にあることは、有機物を腐らせ、各種のバクテリアが空気のあることで繁殖して、肥料の効目を大きくしていると同時に、植物の根もまた土中の酸素で呼吸することができるのです。

土の中のことはだれも考えませんが、根がのびてこそ、葉も茂り花も咲くのですから何はともあれ土中で根が呼吸できないことには育ちということがありません。

大雨がふれば水は引いていくときに空中から新しい空気を吸いこんでいるのです。水はけのよい土などとよくいいますが、水はけて空気がよく吸いこまれる土が、よく植物を育てることになっているわけです。

土粒と土粒との間に空気が入れないようでは、寒天や練ようかんみたいで、水分や養分はあっても育つことができません。カステラやシオガマのような土であってこそ、根がのびて育つことができるのです。

(四) 土の中は真暗だということ。

根は日光のあるところではよく育ちません。暗いということ、は、植物の生長ホルモンが有効にはたらくいて、あえて根ばかりでなく地上の緑色部分も暗い夜の間に伸びるのです。

(五) 土は植物を支える役目をもっている。

根が土の中に張ってはじめて植物が直立して育つもので、空間では立つことができません。

以上五つの条件があれば植物の地下での営みは満点です。そして地上部が日光に当って葉緑素の作用で澱粉をつくって自体の栄養をつくっていくことができれば植物の生活が成り立つのです。

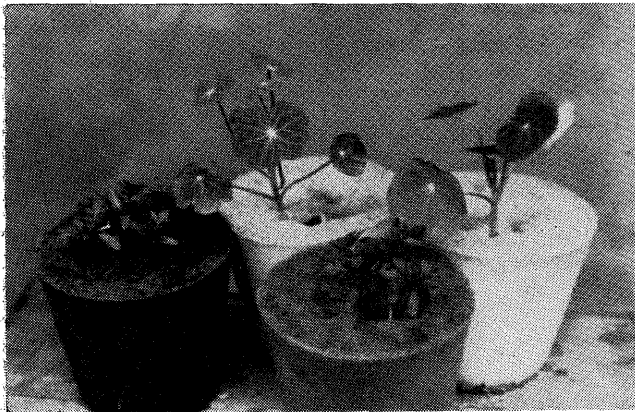
庭がないからと弱音をはかないこと

都会では土地がせまく、私の家には庭がないから草花を育てることができませんとか、土が悪くてとても育ちませんと頭から弱

音をはいている人がよくあります。

アパートや団地のくらしでは一層そのようなことがいわれがちです。それは土がなくては植物が育たないと決めこんでいるからです。

土がなくても植物は育つ――さあ、これをよく御覧下さい。(実物を示して)

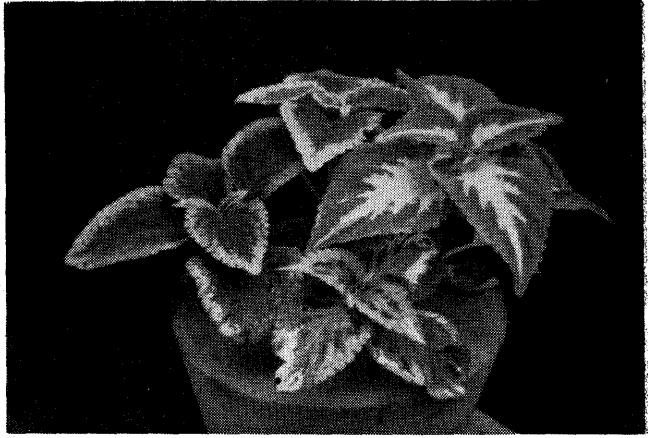


水栽培のいろいろ・ポリウレタンにたねをまいて育ちはじめたキンレンカとマリーゴールド

これはマツレスの中味、ポリウレタンの一かけにこの通り立派にコリウスが育ったものです。ざぶとんの中味のスポンジにこの通り色もよくしかも元気に育つこの植物をみて何ということができるといえるでしょうか。

それは、植物

水栽培のいろいろ・ポリウレタンに育てたコリウス



は土のみにて育つに非ず、親がなくても子は育つ、土はなくても植物は育つということの証明です。

これは、ポリウレタンをカミソリで切れ目を入れて、そこにさし芽しておいたもの、水をやっていくうちに根が出る、それがのびる、ときどきは化学肥料を水にとかして与える、それを日光にあてる、ということであって育っているのです。

さて、このポリウレタンのスポンジには、水をときどきやる、つかめば空気が出入する、中は真暗で植物は倒れぬように支えられている、と五つの条件を満足させているのです。

もう一つこれを御覧下さい。これは、ポリウレタンにたねをまいておいたものです。水をやり芽が出て育てばこの通りスポンジでアフリカホウセンカが育って花が咲くのです。

次に、コップの中のコリウス——これは水だけで育っています。

次にこのサボテン、文鳥丸というサボテンですが、このスチロールの鉢の中で水だけ吸って五年間育っているものです。

サボテンは砂に植えよとか、水はきらいだとか人がいますが、このスチロール鉢では水につかりきりです。ただ根首まで水にひたしてしまおうと呼吸ができないので、いつでも腰ぎりの水に根先だけをひたしておくのです。

根は、先端の毛根から水分や養分を吸い、古くなった根の表皮は呼吸しているのです。

サボテンが砂漠に育つというのはそこには砂があるというだけの話で、砂だろうがガラス層だろうが、砂利だろうが、サボテンが支えられていればいいだけの話。砂粒の間には空気が通り、雨期には水を吸って体にふくんでふくれているだけのことで、スチロール鉢のサボテンは根先が水に浸って十分吸水するので、下手に砂に植えたものよりはるかに早く大きくなります。

サボテン水栽培の注意——水栽培しようというサボテンは一旦、鉢から抜いて一日ほど日かげで乾かしてスカカリ乾かしておいた



水栽培のいろいろフレンチ・マリーゴールド

ものを、小さければクロッカスグラス、大きなものはヒヤシンスグラスのような容器にのせて水につけます。すぐに根が出てきますが、のびるにしたがつて根もとの部分が空気にふれるように水位をいくらか引下げていきます。

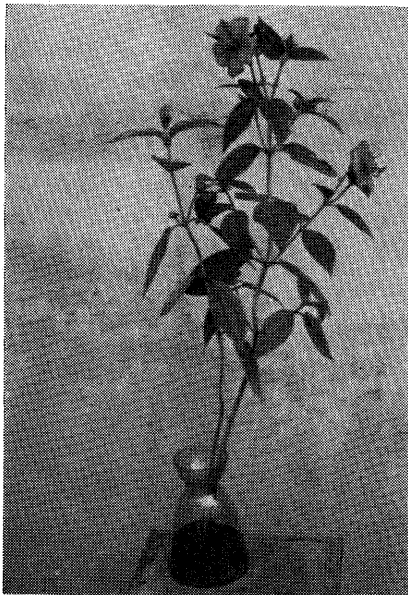
暑いときに鉢から引抜いたりして傷口が乾いていないものを水びたしにすると腐りますから注意して下さい。

水栽培がおもしろくてできる草花

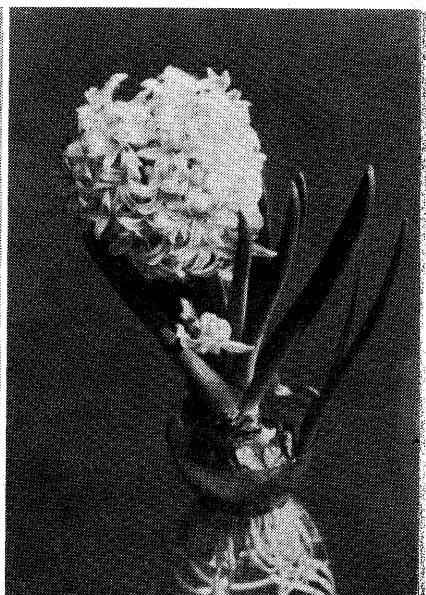
四季咲のベゴニア、シュウカイドウ、クフェア、コリウス、カッコウアザミ、マリーゴールド、メラストマ、ホクシヤなど。

いろいろの水栽培 砂にサツマイモの苗を植えて水だけやって

水だけの栽培で咲いたノボタン



だれにもやさしくできるヒヤシンスの水栽培



いても日光にあててやる限りはある程度育つて秋には小さいながらにサツマイモができます。肥料をやらなくても育つのかということになります、とにかく生きてはいるのです。

とにかく水は生きていく上には不可欠のもので水さえやれば死なずに、生きてはいるのが植物です。

スポンジにさし芽で育てるのも、そこにたねをまいて育てるのも、水さえやれば生きていくことを利用したものです。

ヒヤシンスや水仙、クロッカスは秋からよく水栽培につかいますが、これは球根自体に花が咲くまでの養分を十分にたくわえているので、幼稚園の子どもたちにもやさしく出来るものですが、グラスに引かかりがあつて球根がのっているようにできているので、その容器をつかうのが便利です。もし容器がないときはドンブリ茶碗、コップなどに、水ごけをつめてこの上にのせておくだけでもよろしい。

場合によっては、粗い砂だけを入れてその上に置いて安定させておいてもいいのです。

水耕、砂耕、礫耕などという新時代の栽培法がありますが、温室やビニールハウスで水やりの世話がはぶけてレタスやキュウリなどの清浄栽培ができるというので、話題になっていますが、話をちぢめればコップに砂を入れて草花や球根を育てるのと少しもちがいはないのです。

水だけの水栽培では水位を自由におとしつけますが、砂や礫に植えてしまうと、水位が判らないで困ることがあります。また毛管水で少しの水でも砂全体に水分がいきわたるので、株際の根も発育する長所もあります。

何れにせよ、水びたしではなく根が呼吸できるように水位を下げたり、水をと리카えたり工夫することが必要です。

肥料が必要なこと

水だけでも育つといいましたが、それは最少限に生きているというだけで、発展進歩はないわけです。

植物を分析してみるとそれを構成している成分は、炭素C、水素H、酸素O、窒素N、りん酸P、カリウムK、鉄Fe、マグネシウムMg、カルシウムCa、硫黄Sの一〇成分から成り立っています。

このうち炭素は、葉とか茎とか緑色の部分が日光にあたると同化作用で酸素と水素を加えて澱粉として養分がつくれます。

その他の成分は根から水にとけて吸収されるもので、どの植物も一ぱんたくさんに必要とするのは窒素、りん酸、カリの三成分です。その他の鉄とか硫黄、マグネシウム、カルシウムなどはほんの僅かしか要らないし、それは、土の中にも水道水の中にも十分ふくまれているものです。

窒素、りん酸、カリの成分は、それぞれ、葉や茎をつくったり、

花や果実をつくるのに不可欠の養分ですから、畑につくるときでも、それが足りないのを、これを肥料として補ってやる必要があります。もしやらなければ、植物はやせ、花もつかない実もならぬことになるわけです。

しかもそれが、それぞれのバランスをとってよい具合に吸収される必要があります。

たとえば油類とか米類とか、それがよく腐って水にとける状態になつてはじめて肥料になるのであつて、そのままでは肥料になるどころか、腐る途中に出る酸とか熱とかで植物の根をいためることさえあります。

土の中にそれらの有機肥料を入れることは長い間に腐つて肥料になるのであつて、水栽培で左様な肥料を水中に混入したのでは水がくさつてしまいます。

そこで水栽培につかう肥料はすぐに水にとけて吸収される化学成分となつていふことが必要ですから、化学的にそれらの肥料を組合わせたのが化学肥料です。

しかも水にすぐとけて、直接に肥料となることが必要で、ハイポネクスとかハイブランドFとかいう化学肥料がつくられたわけですね。

一般に成分は濃厚で、濃ければ効くだらうなどとウカツに考えて与えようと一晩で根をいためてしまいます。必ず所定の水量にう

すめてつかうようにして下さい。

ところで水の中に肥料分があるとき、それが日光にあたると緑色の微細な藻類が発生してきます。そしてやがては緑色にドロドロして見苦しいほどまでにふえてしまいますから日光を水にあてないようにするのがよろしい。くらいところでは藻類が育たないからです。また週に一度は肥料液をとりかえて下さい。

たとえば肥料分が若干残つていたとしても若干量のことですし、それに放置したために液が酸性化するのはです。水の酸性がすくなくならぬと大抵の植物は育たなくなります。この意味からも一週に一回、一〇日に一回は水をとりかえる必要があるのです。

球根類の水栽培のように水に肥料をまぜなくても、球根の養分だけで育つものは藻類も繁殖しませんから、日向に出してもよろしいが、日光にあたるといふことは藻類の発生を促すことになるので、根がのび切るまでは、暗いところに置いておくのがよいのです。

水に酸素を新しい水は酸素がとけこんでいて植物の根のためにもよろしいが、停滞していると逐次少なくなつていけないので、とりかえることが大切です。

オキシフル(30%)を一―二滴、一―の水におとせばそれだけ酸素の含量がふえますから、とりかえる代りにつかってもよろしいが、大量に入れると有害です。

秋から春にかけての水栽培―秋からは冬に向って次第に温度が低くなるので、これに適した水栽培は温帯植物、つまり、秋まき草花、秋植球根、秋植宿根草が適しています。これらは一五度C前後の水温が根の發育に適していて、秋のうちによく根がのび、冬は水が〇度Cになってもいたみません。

しかし、冬もなるべく五〜一〇度Cに水をあたためる工夫をすれば、冬でも徐々にのびてくれます。

プリムラ、ロベリヤ、秋植球根などの水栽培ができます。

春から夏にかけての水栽培―春から次第に水温も上り二〇度Cをこえることもありまます。こうなると熱帯原産の植物が水栽培に適するもので、ベゴニア、ビレヤ、ドラセナなどの熱帯植物はもちろんのこと、春まきの草花も水栽培ができます。

しかし、真夏はいかにも水温が高すぎるので二五度C以上にならぬように気をつけることが大切です。

つまり水に日光を反射させるようなことはよくありません。それに強光線を喜ぶ植物、弱光線に適する植物とがあるのでこれも区別して置き場所を工夫してやります。

アサガオも水栽培ができます。子葉のひらいたアサガオの苗を、根先だけ水につけて、暗くなるように工夫し、葉には日光を十分あててやります。もちろん屋根まではい上るほどの育ちにはなりませんが、水をやったりやらなかったりでたらしめな栽培をするよりは水栽培の方がはるかに合理的です。

一つ大いに自信をもって土はなくても植物は育ち花も咲くということを実際にやってみて下さい。

子どもたちの植物に対する観念も変わってくるでしょうし、いかに自然がうまく植物を育てているか、ということをしらずしらずのうちに会得することになることでしょう。

(千葉大学)

幼児の教育 第六十六巻 第一号

一月号 © 定価八〇円

昭和四十一年十二月二十五日印刷
昭和四十二年 一月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

幼稚園教育課程の基底

第一部目標編

宮内 孝編者

「望ましい経験や活動」——基底——
を实践によつて組織づけ、新しい教育要
領に従つた「基底」を作成した書。教育
課程、指導計画の編成、作成に重要な資
料となる。六つの国立大学附属幼稚園の
共同研究になるもの。

A 5・二〇六頁・六〇〇円

よい子を育てる教育計画

—改訂幼稚園教育要領に基づいて—

佐賀県私学幼稚園連合会編

佐賀県私学幼稚園が独自の立場で研究、
まとめた教育課程で、教育要領との関連
事項、教材準備のための資料欄などを
つ、一地方のものでなく広く活用できる
内容をもっている。

A 5・一九〇頁・七〇〇円

フレーベル館

ホーム キンダー

《 2 月 号 》

おかあさまがたへおすすめください

園と家庭

●学用品の準備はこうしたら

入学をま近にひかえて準備に忙しい月で
すが、今月は入学時に必要な学用品の準
備の心がまえを解説してあります。

●入学までに治しておきたい病氣

規則正しい学校生活に入る前に、治して
おきたい病氣について、基本的な心がま
えや、注意のし方をまとめました。

観察

●かがみ

顔や物を写してみるかが
みのおもしろい現象をや
さしく説明しました。

●高速道路

子どもたちの大好きな自
動車がスピードを出して
走れるハイウエーをカラ
ー写真で紹介しました。

*マンガ「あらあらマアちゃん」*テスト

*子どもの料理*つくります! *読者相談
その他家庭における幼児教育のヒントを
いろいろ紹介してあります。

Ｌ判 多色刷 二四頁 定価四〇円
キンダーブックと合わせて一〇〇円

発行

株式会社 フレーベル館

ことしも また 新鮮な アイデアで...

楽しさと夢でいっぱいです!



42年度フレーベル館新学期用品

出席カード(特).....	100円
出席カード(並).....	60円
出席カード(仏教版).....	60円
自由画帳(特A)ラセン.....	110円
自由画帳(特1)ラセン.....	75円
自由画帳(特2)クロス.....	75円
自由画帳(A1)ラセン.....	60円
せいさく帳(特A)ラセン.....	130円
せいさく帳(特1)ラセン.....	80円
せいさく帳(特2)リボン.....	80円
せいさく帳(A1)ラセン.....	70円

カラーノート(1)(2).....	各65円
カラーあそび.....	75円
きりがみあそび(1)(2).....	各70円
ステレオかみざいく.....	70円
おりがみあそび(1)(2).....	各70円
楽しいお仕事(カード1・2).....	各65円
あたらしい工作(1)(2).....	各65円
工作カード(1)(2).....	各85円
キンダーワーク(1)(2).....	各70円
ことばあそび.....	80円
かずあそび.....	80円

詳しくはカタログをごらんください!!

42年度新学期用品は 最寄りのフレーベル館代理店・出張所へご用命ください

東京 **フレーベル館** 神田